

国民経済の成立と農村市場

—イラン・マルヴダシト地方における実証的研究—

後 藤 晃¹

はじめに

国民経済の発展に統一的な国内市場の存在は条件となる。とりわけ自立的な経済発展を目指した発展途上国では、少なくとも 1970 年代まで、国内的な需要を拡大する市場の形成が必要とされ、農業国であった当時の発展途上国では農村市場の発展が課題となっていた。しかし、社会・経済的な制約や政治的理由によって十分な改革が進まず国内市場に十分な発展がみられなかった国も多い。本論は農村市場に視点を据え国民経済の発展と深く関係する地方における市場の構造をイランの具体的な事例で検討することを目的としている。

イランで統一的な市場がいつ成立したのか。人口に占める農村人口の割合が高く国内生産に農業が高い比重をもつ途上国において、農業生産者とともに農民が商品生産者として生産力の担い手となる時点をもって国民的な市場の成立期とすると、20 世紀半ばを画期とすることができる。農地改革が全国的に施行されるのが 1960 年代半ばであり、その後、自立経営者となった農民と企業的な農業経営者によって農業生産力が急速に高まり、農村市場が急速に拡大するからである。

イランの農業史をたどるとすでに 19 世紀後半に商業的農業の展開があった。イギリスを中心とした国際的な分業体制にイランもまたアヘンや綿花、米の農産物輸出国として組み入れられ、世界経済の周辺部分として国内市場と切断された形でイランの農業部門が市場経済に編成された。商品作物生産の担い手は村落域を支配する都市の特権エリートであり、この時代の農民は人格的にも領主（地主）に従属し、農民的な市場は展開していなかった。

第一次世界大戦後、国内的にはイランの実質的な独立が展望され、1921 年にクーデタで権力を手にしたレザーハーン（25 年に王位に就きレザーシャーとなる）は独裁を強めながらも国家統合をはかり経済自立化政策をとる。経済的な従属を避けるべくそれまでの西欧諸国との通商条約を破棄し、エタティズムによる経済政策を採用して国家主導による輸入代替工業化を進めた。この時期は国民経済の形成期といってよい。しかし資本の内部的な蓄積のために大衆の強制貯蓄を必要とし、農業部門からの蓄積が大土地所有者である地主との同盟によって進められた。地主は農業および水利投資を積極的に行うものの収奪の対象であった村落域の市場は狭隘なままであり、地

主制は農村市場の形成を妨げる制度的要因でもあった。

第二次世界大戦後、都市に新たな社会層として資本家、中産層、労働者層が成長をはじめる
と、この新興市民を中心に地主制の改革を求める運動が活発化する。これは地主支配下で呻吟す
る農民の存在が民主的な国民国家の形成を阻害するとの認識にもとづくが、同時に経済発展のた
めの社会的基盤の形成という経済的動機があった。地主制下の農民は農業余剰のほとんどを収奪
されて窮乏化し、このことが国内市場を狭隘かつ不完全なものとして統一的な市場の形成を妨げ
ており、地主制の改革が社会的に求められ始めたのである。市場を不完全な状態にとどめていた
元凶の一つが農村を覆っていた前近代的な地主制にあったということである。

1962年に地主勢力の反対を押さえ国王主導で農地改革法が成立する。農地改革は体制の政治
的基盤の転換をはかる政治改革としての側面ももっていた。1906年の立憲革命以後も、地主階
級や都市の特権エリートが強い力を維持し王権もこれらのエリート集団を権力の基盤としていた
が、都市の中産層や資本家層が成長する過程で利害の対立が表面化し、王政が政治的基盤を地主
等の旧権力層から新興勢力に乗り換える改革でもあった。この点で、農地改革は資本主義的な発
展と統一的な市場の形成の環境を整える制度改革であったといえてよい。改革によって地主所有
地の農民への譲渡が強制され農民的土地所有の道が開かれた。また法令によって地主経営の継続
が禁止され旧地主が近代的な農場経営者へと衣替えする契機ともなった。つまり、農業生産力と
農村市場の両面で発展を妨げていた制度的制約が取り除かれることになり、農地改革は国民的な
市場の形成と国民経済の発展を導く重要な制度改革であった。

本稿は、1960年代に実施された農地改革前後で時代を分け、2つの時代における農業を基礎と
する地方の市場について比較分析することを目的としている。第一章では、農地改革が実施され
る以前の1950年頃を
扱い、農業余剰が地主
によって都市に運び出
され、農民に残された
生産物をもとに成り立
つ農村市場の構造を描
く。続いて第二章で
は、農地改革を経過
し、経済が成長過程に
入った1970年代半ば
を扱い、急成長する地
方と農村市場の関係を
具体的な事例をもとに
描く。対象とするのは

図1 イラン全国とマルヴダシト地方



イラン南部のマルヴダシト地方であり、筆者が1970年代前半に実施した調査をもとに実証的な分析をおこなう。

本論に入る前にまず対象とする地方について概況を説明する。

マルヴダシト地方はイランの南部のファールス州にある一つの地方である。首都テヘランから南へほぼ1000 km、トルコの東部からイラクの国境に沿って南東に伸びるザーグロス山地に位置している。ザーグロス山地は複数の褶曲山脈で構成され、乾燥度の高いその北東側は山脈の間に浸食で生まれた多数の平原が広がっている。マルヴダシト地方はこの谷平原の一つである。

図2 マルヴダシト地方の谷平原

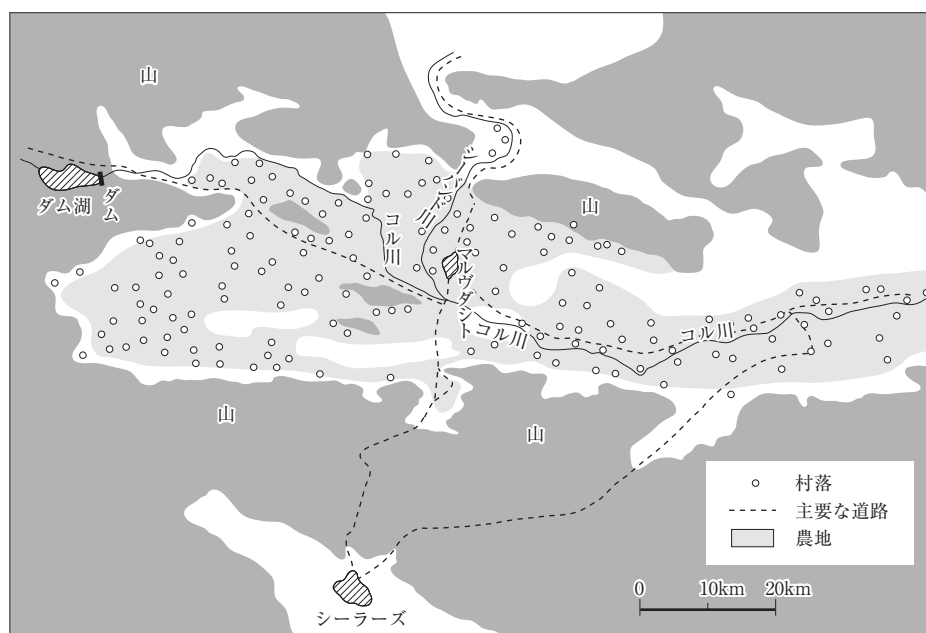


気候は、年平均の降水量が300 mm 足らずの乾燥地である。このため農業は人工的な灌漑を条件に成り立つ。灌漑用水は谷平原の中央を流れる河川（コル川とシーバンド川）と山際を流下する地下水から獲得してきた。コル川には1000年以上前に建設された5つの堰が近年まで利用されこの堰から無数の水路網が走り農地を潤してきた。また山際に掘られた井戸

から地下水路で水を農地に導く多数のガナートが伸び、これらの灌漑施設によって幅が平均20 km、長さ100 kmに及ぶイラン有数の広大なオアシス農業地帯が形成されている。近代的な水利事業としては、一つは1972年に谷平原の入り口に完成するダムとダムでコントロールされた水を安定して農地に導く近代的な水路網の整備があり、また一つに村の農民や企業的な経営者によって動力で地下水をくみ上げるポンプ揚水井戸の普及がある。この結果、1970年代後半以降、オアシス農業地帯はその規模を大きく拡大した。

図3は、1970年代半ばにおけるオアシス農業地帯の村落と農地の分布を示したものである。村落については、谷平原の大部分を占める5つのデヘスタン（行政村）、ラームジェルド、ベイザー、マルヴダシト、ハフラッケソフラー、コルバールに属するものが記されている。イランではじめて村落統計がとられたのが1976年であり、この図もこの統計に依拠している²。長さ100 kmに及ぶ農業地帯には1970年代半ばの時点でおおよそ16万ヘクタールの農地が広がっていた。このうち4割が村の農民、6割が企業的な農場経営者に属し、灌漑農地が全体の7割近くを占めていた。また年間の作付面積は当時この地方では休閒農法が採られていたことで、農地全体の5割ないし6割程度であった。

図 3 マルヴダシト地方の谷平原の農地と村落 (1976 年)



(出所) イラン統計センター『イラン村落統計総覧』(ペルシア語), テヘラン, 1976 年のファールス州の部より筆者作成

(注) この統計には非農業集落や地主の農場の事務所等も含んでいるが, 地図上には一定の規模をもつ農業村落のみが記されている。

一 1950 年代の村落と農村市場

1. 地主制期における農村市場

マルヴダシト地方はイラン有数のオアシス農業地帯であり高い農業生産力を誇っていたが, 少なくとも 20 世紀半ばまではこれに相応する農村市場の発展はみられなかった。むしろ市場はかなり狭隘であったといってよい。村落域の経済はすでに商品経済化していたが農民の購買力は小さく, 地方の商業活動のセンターとして機能していたのは商業区をもつ 5 つの小さな町と村だけであった。このうち町と呼べるのはザルガンとハラメの 2 つだったが, これらの町も 100 件余りの商業と手工業の小さな店があるに過ぎない。

農業生産力に比して農村市場の規模が小さかったのは, 一つに, 商品経済化していたとはいえ人口に圧倒的な割合を占めた村の住民が貧しく, また自給的性格を一部の残していたことによる。彼らは自ら生産した農畜産物を食料として消費し, 日用品などを市場で調達していたものの購買力は小さかった。

村落域の住民が貧しかったのはこの地方を覆っていた地主制に主たる要因があった。マルヴダシト地方ではすでに 19 世紀末より商業的農業が展開し, 小麦に加えて綿花, 砂糖ダイコンなど

大量の農産物が市場で取引されていた。しかし農産物の多くは地主によってこの地方の外に運び出され、農民によって地元の市場で商品化された農産物の量が少なかったことでこの地方における農村市場もきわめて小さかったのである。

農地改革以前のマルヴダシト地方の土地関係で規定していたのはマーレキ・ライーヤト制と呼ばれる地主制度である³。マルヴダシト地方の場合、農地はそのほとんどが大土地所有者である地主によって所有され、農民的所有はほとんどみられなかった。地主は通常、村を単位に土地を所有し、規模の小さな地主でも数百ヘクタール、大地主となると複数の村に数千ヘクタールの農地を所有していた。地主は土地の所有者であると同時に灌漑用水に対する権利の保有者であった。乾燥地では灌漑が農業の条件となり、灌漑用水の権利者は農産物への強い請求権をもつことができた。したがって、土地と水が地主に帰属していたことは地主の農民に対する強い権限を保証し、地主は半ば領主的な権限を有し「村の所有者」としてこの権限を行使した。また、地主は村の農民に寄生する単なる農業余剰の収奪者ではなく経営にもコミットし、所有する村を自らの経営する農場とし村の農民を農場の雇農として編成した。歴史的背景は異なるが、人格的にも地主に従属する村落の農民を労働力として組織する領主直営地や植民地におけるプランテーションを彷彿させる農場であった。

農民経済を基礎とした農村市場はその規模が農民の所得によって規定される。地主制下での生産物に対する農民の取り分は、この地方の慣行では、小麦で3分の1、砂糖ダイコンなどの夏作で2分の1であった。ただ、農民の取り分からさらにさまざまな名目で収奪がなされた。一方、地主は地主取り分の農業生産物のうち砂糖ダイコンは1935年に谷平原のほぼ中央に完成した官営の製糖工場に、綿花などの工芸作物はシーラーズなどの都市の繰綿工場や紡績工場に運び、小麦は50 km離れた州都シーラーズの農産物市場で売却した。

地主がマルヴダシト地方の市場と関係をもたなかった背景には、都市が村落域を支配し所有してきた都市と農村をめぐる歴史的な関係がある。19世紀のイラン社会についてケディは、村を所有する多くの領主層が都市に居住している点で西欧の封建制との違いを主張する。一方ラムトン⁴は、イランの土地制度は国家による官僚への土地の割り当てであり封建的なものではないと述べ、土地をめぐる支配の構造についての認識を異にしていた⁴。しかし村落域の村を支配したのが都市の権力層であったということでは一致していた。20世紀に入り近代国家としての体制を整える過程で土地の権利は私的な所有権に変わるが、都市の権力層が村落域の土地を所有し村の農民を使役して直営農場を経営するという都市と農村の関係は農地改革まで大きく変わらなかったといってよい。地主は中央や地方の官僚や名士層また都市の大商人層を出自とする都市のエリート層であり、20世紀半ば近くになると売買などで土地移動が進んだことで地主の差配や新興の都市上層が土地を譲渡されて地主となる傾向がみられた。しかし、地主の中核はあくまで都市のエリート層であり、彼らは都市に居住し、農場には代理人をおいて経営をおこなった。つまり、都市がオアシス農業地帯の農地を所有する構造が20世紀半ばまで続いていた。農業余剰が

地主によって収奪され都市で商品化されたことで州都シーラーズの豊かさが保障された一方で、これとは対照的にマルヴダシト地方はイラン有数の農業地帯であったにも関わらず都市はおろか商業機能をもつ町も十分には発達しなかったのである。

2. 農村市場を規定する農民経済

では農村市場を規定する地方の農民経済の規模はどの程度であったのか、農民の収入と支出から推計することにする。

村社会は地主経営の農場で雇用される農民家族と非農家で構成されていた。当時、村内に雇用の場がなかったため村抱え的な床屋や小さな商店以外に非農家の数は少なく、したがってここでは住民の多数を占めた農民のみを対象とする。ただ、根拠とすべき農家の家計に関する公的な資料は存在しなかったことで、筆者が1970年代初めに調査をおこなったポレノウとヘイラーバーの2つの村の事例をもとに推計する。調査時点ではまだ1950年代の村の様子を記憶している農民も多く聞き取りを通して地主制時代の地主と農民の関係および収入と支出の状況を数値的にも知ることが可能であった。2つの村の事例でマルヴダシト地方全体を推し量るには無理がないわけでもない。しかし地主制の時代には農民1人当たりの収入は農民間でまた村の間に大きな差はなかった。地主経営の農場は一般に労働力が不足していた。このため農民が耕作する農地の規模は犁を牽引する雄牛の能力に対応し年間の耕作地ではほぼ5ないし6ヘクタールであった。また収穫された農産物の農民の取り分も地方の慣行でおおよそ決まっていた。したがって、マルヴダシト地方では農民1人当たりの耕作地の規模に差が小さく、生産物に対する農民の取り分率が一定であったことから、この2つの村で代表させて大きな誤りはないと考えられる。

1) 農民の収入と支出

地主経営で生産された主な作物は、小麦・米などの穀物と綿花・砂糖ダイコン・ゴマなどの工業原料作物からなる。一方、農家が自給用に必要とされた野菜類は農民の裁量で生産が可能な小さな庭畑でのみ生産が可能であった。小麦は当時はまだ農業の近代化が進んでいなかったため生産性が低く、1960年の農業統計によるとマルヴダシト地方を含むファールス州の灌漑小麦の1ヘクタール当たりの収量は1.15トンであった⁵。これは農民からの聞き取りによる数値とほぼ一致し、2006年と比べると4分の1ほどの低い数値である。農耕方式は作付け循環に休閑を挟む休閑農業であったことで毎年、耕地は全体の2分の1ないし3分の2が作物生産に利用され、この利用地の7～8割で小麦が生産された。砂糖ダイコンなどの夏作は商品価値が高く単位面積当たりの収入は小麦の2倍以上あったが、水消費が多くまた乾季に生産されたため作付面積は耕地の1割ないし2割程度に限られていた。

1 農民当たりの年間の利用耕地面積を6ヘクタール、小麦と夏作を4対1の面積比率で生産する標準的な村を想定し農家当たりの収入を概算すると、小麦が1.6トン、夏作が小麦換算で1.0

トンの計 2.6 トンである。

概算の根拠を示すと、まず小麦は約 4.8 ヘクタール、1 ヘクタール当たりの収量が 1 トン程度であったから 4.8 トンの収穫量が見込めた。このうち 3 分の 2 は地主の取り分であったから、農民には 1.6 トン程度が残された。砂糖ダイコンなどの夏作には、作付け地全体の 5 分の 1 が割り当てられたが、単位面積当たりの粗収入が小麦のほぼ 2 倍であったから、小麦換算で 2.4 トンの収入になった。収穫物は地主と農民で折半を原則とした。ただ地主はさまざまな名目で経費を差し引いたため、農民が実際に手にしたのは、小麦換算で 1.0 トン程度である。

農民には地主経営地における収入（小麦 1.6 トン、夏作 1.0 トン）とは別に牧畜や副業による収入があった。牧畜による収入は主として羊やヤギの販売である。家畜は放牧方式で飼養し、農家当たりの家畜数は遊牧民の定住村で多い傾向があった。20 世紀初頭まで半遊牧の生活をしていたヘイラーバード村の場合、1966 年時点で農家当たり平均 15 頭であったが、これはマルヴダシト地方の村の平均よりかなり多い数である⁶。家畜は農家にとっての資産としての性格をもっているが、羊やヤギは貴重な現金の収入源でもある。価格は、農民の記憶によると、羊が小麦換算で 200 kg、ヤギが 100 kg であり、1 年間の販売頭数を羊 2 頭、ヤギ 2 頭とすると、収入は小麦換算で 600 kg 分に相当した。ただ家畜飼養の目的としては乳や毛など生活資料の獲得もあり、乳は自給用のヨーグルトやチーズに加工され、羊毛は女性が織るじゅうたんの原料として利用された。

もう一つの収入源は絨毯（じゅうたん）である。絨毯を織る技術は遊牧民社会で母から娘へ女系で伝えられ、遊牧民の定住村が多いマルヴダシト地方でもこの伝統が引き継がれていた。農村における絨毯生産は商人が道具と染色された毛糸、それにデザインを持ち込んで織り賃を支払う問屋制をとるところが多いが、この地方では生産の過程に商人が介在することはなく、生産された絨毯が村を訪れる買い付け商人に売却された。価格は 100 cm×150 cm の大きさのものが小麦換算で 300～400 kg 程度、2 枚で 600～800 kg となった。

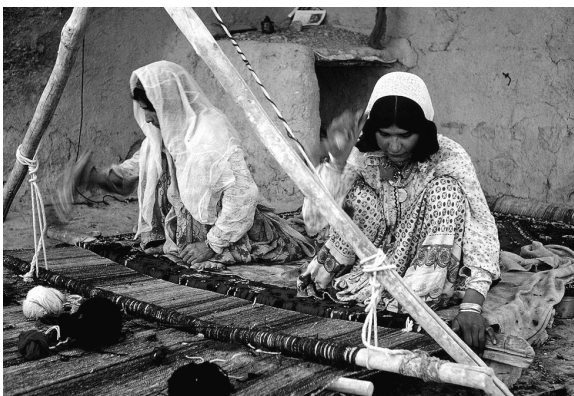
以上から農民家族当たりの収入を概算すると、大雑把な数字ではあるが、小麦換算でおおよそ

3.8 トンとなる。

この収入から諸経費が控除される。費用は農業および絨毯生産に関わる費用とコミュニティの維持のための社会的な費用がある。この額については不明な点もありまた農民の間で差がみられた。

農業生産の費用をみると、地主経営の農場では、播種用の種や灌漑のための水代は地主の負担であり、農民は農具と農作業に不可欠な役畜である雄牛の経費を

図 4 村の女性の絨毯織り



負担した。1頭の雄牛をもつことが農場で働く条件であり雄牛は農民が用意することになっていたが、農民に資金がないため通常は地主からの前貸しにより、この費用が小麦の収穫時に地主に支払われた。運搬などに使うロバや犁、ビール（手鋤き）、鎌などの農具は農民自身が調達した。鉄製農具は、機械製品が普及するまでは鍛冶屋によって作られ、農民が購入と修理の費用を支払う必要があった。しかしこれらの支出は不定期であり年間の費用を計算するのは難しい。たとえば雄牛の費用は農民の資金の有無で差が大きく雄牛が死亡によると負担が増えた。仮にこれらの費用を作物からの収入の4分の1とすると小麦換算で0.65トン（2.6トン \times 1/4）が農業生産のための農民の負担となる。

絨毯は農民が飼養する羊の毛を原料としたが、不足分は購入する必要がある、また羊毛の染色は専門の染色職人によった。これら経費については正確な数字で示すことができないが、絨毯価格の2割とすると小麦換算で120kg程度となる。

社会的な費用としては、一つに地主の差配兼村長であるキャドホダーに対する支払いがある。これは地方の慣行により小麦の農民取り分のうちの5%ないし10%であり、小麦の収入が1.6トンであるから80kgないし160kgが各農民から支払われた。また小麦の収穫の際には、村落域に住むイスラム僧に対する喜捨があり、2,3の村を巡回する村抱え的な床屋に対して収穫時に成人男子1人当たり30kg前後の小麦が渡された。

以上から、経費を概算すると小麦換算で1.0トン弱となり、これを差し引いた農家当たりの実収入は小麦換算で2.8トンであり、これが農家の可処分所得となる。農民はここから自家用の食料として小麦を確保した。成人1人の年間の小麦消費量は200kgであったから家族数を成人換算で4人とする0.8トンが自家消費分となる。したがって、農家が商品化できたのは自家用分を除いた小麦換算で2.0トン前後であった。

図5 農民が使っていた鎌



2) 農民の消費

次に、村の住民の生活のための消費をみる。ただこれも観察を通して知る以外の方法はない。村民の生活は食については自給的性格が強く、日用品等は市場で調達したが、生活そのものはかなり質素であった。

食生活は自家用に保存された小麦を原料とする小麦粉を焼いたパンを主食とし、家畜の乳から作るヨーグルトとチーズ、それに若干の野菜が加わる程度である。乳製品は自給が可能であったが、野菜や果物は自給できない村も多い。地主経営の農場が穀物と工業用の原料作物に特化して

いたこととで、ポレノウとヘイラーバードの2つの村でも野菜や果物はまったく作っていなかった。その他に、塩、砂糖、茶などが消費されたが、肉や米は結婚式などハレのとき以外はめったに口にしなかった。

住宅は、土とワラを混ぜて作った日干し煉瓦を住民自身の労働で積み上げて建てられた。部屋は通常は1つの居間と台所、それに家畜囲いからなり、室内の壁はバンナー（左官）職人に依頼する。天井には40 cm間隔で直径5, 6 cmの丸太が渡され、葦を編んだブーリヤー（図10）が敷かれて天井の表とし、その上に土をのせ固めて屋根とした。したがって建築費用は丸太やブーリヤー、それに木製のドアの代金および左官の費用程度である。経常的な支出ではなく、年間の償却費はそれほど大きなものではなかったと考えられる。

図7 ポレノウ村の日干しレンガの家

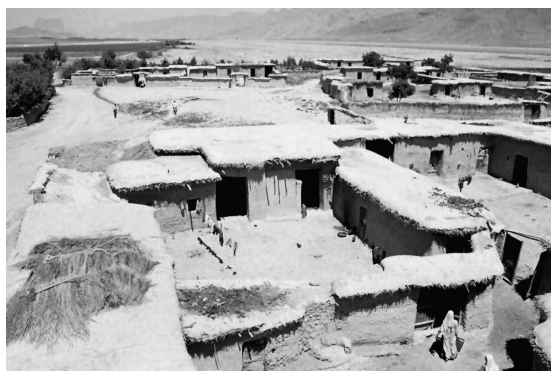


図8 村の住民による日干しレンガ作り



図6 パン焼き風景



室内はきわめて質素で、居間の床は固められた土の上に古びた平織りの敷物や自家製の絨毯が敷かれていた。そのほかは寝具、衣類、布製の靴、それに棚に家族の写真などの小物がわずかにあるだけである。灯りはランプでとり、1個か2個のハリケーン・ランプがある。また台所には、井戸で汲んだ水を貯めておく水甕、パンを焼く鉄板、鍋、食器、コップなどが置かれている。これらはいずれも市場で購入されたが長期に使用が可能であり、生活が質素であったことから農民にとっては耐久消費財的性格をもっていた。

日常的には質素であったが非日常的な支出はかなり大きい。とりわけ結婚に関わる支出がめだった。結納のために多くの羊やヤギ、現金を準備する必要があり、さらに結婚式のための資金を用意しなければならず、このため貯蓄の必要があった。

小麦換算で2.0トン分がこれらの消費に使われまた貯蓄にまわされた。日用品の価格に対する小麦の相対価格がどの程度であったかについては詳しく知ることはできないが、最低賃金の日雇農業労働者の日当が小麦15kg前後であったから、この130日分の賃金にほぼ相当する。農民の消費の様子を見る限りでは購買力はかなり小さなものであったといつてよい。

3. マルヴダシト地方の市場構造

1) 〈商業・手工業村〉

農民の購買力が小さかったため農民経済を基礎に成り立つ農村市場の規模もまた小さかった。この地方に商業センターとしての都市の発展がみられなかったのもこの市場の小ささと関係している。しかし、農民は自給的性格を残していたとはいえすでに商品経済化が進んでおり、複数の町や村が商品交換の場として機能し、また村の住民の需要に応じた手工業が存在していた。

図9はマルヴダシト地方の谷平原の村や町の分布を示したものである。ほぼ100 kmに渡ってオアシス農業地帯が広がり、ここに200余りの村が散在していた。村のほとんどは農業で成り立つ農業村であり住民の多くは農民とその家族で構成されている。しかし、この村の中には数は少ないが農業に加えて商業部門と手工業部門をもつ町と村が存在した(図9の2重丸でドットしてある)。これらの町や村は幹線道路とその支線沿いに立地し、マルヴダシト地方における商品交換の場として機能していた。

筆者が確認したこうした機能をもつ町や村は5つあった。このうちもっとも大きな町がザルガ

図9 1940年代のマルヴダシト地方における村落と〈商業・手工業村〉の分布



(出所)『イラン村落統計総覧』および実態調査により筆者作成

ンである。シーラズから伸びる幹線道路が谷平原に入る入り口に位置し、古くからの交通の要衝である。20世紀半ばにはマルヴダシト地方の商業的拠点の一つでもあり、道路沿いには100を数える小さな店舗が並んでいた。この中には鍛冶職人やじゅうたん用の羊毛を染色する手工業者の店が複数あり、家屋の天井や床に敷く葦製のブーリヤー製造の作業場が町の周辺に複数存在した。いずれもこの地方の住民の需要に応じた手工業である。

コル川流域にあるバンダーミール村も地方の商業拠点一つであった。この村については後に詳しく述べるが、集落に店舗商店が並んだ一角があり、1940年代には店舗が40余りあった。

これら商業を中心とした町や村とは別に手工業に特化した村もあった。この典型的な村がファターバード村であり、フェルト織をはじめ素焼きの容器、石鹼、鍛冶などの手工業者が数多く住み、とくにフェルト織の小さな工房が50以上あった。

商業や手工業に特化したこれらの小さな町や村を〈商業・手工業村〉と呼ぶとすると、マルヴダシト地方の農民経済を基礎とする商品交換はこれら複数の〈商業・手工業村〉を核とし、農村市場の中心として機能し分業の関係にあった。

村の住民が購入する商品には、衣料、食料、その他の雑貨類、農具がある。このうち衣料は、布地や古着、布団、布製の靴、フェルト製の遊牧民部族固有の帽子などがあり、食料は、村の住民の食生活は多分に自給的であったことで、塩、砂糖など食生活に最低限必要とされるものと野菜か果物である。また日用品としては鍋や食器、素焼きの容器、ランプを使うようになってからは簡便なハリケン・ランプなどがあり、その他、ランプの芯、油、タバコ、マッチなどの必需品である。

図10 ザルガンのブーリヤー職人



農業関係では各種の農具がある。犁、手鋤、鎌などの鉄製の部分は自給できなかったため鍛冶職人から購入し、修理も依頼した。また、女性が作る絨毯の材料である羊毛の染色は染色業者が専門に行った。

〈商業・手工業村〉で扱われた商品を見ると、外部からこの地方の市場に持ち込まれたものと地方の職人が作る手工業品とがある。20世紀半ばにはまだこの

後者がかなりの比重を占めていた。たとえば、農作業で使う鉄製の農具やパン焼き用の鉄板や鍋などの厨房用品は鍛冶職人によって製造・修理がされていたし、飲料用の水を貯める素焼きの容器、石鹼、布製の靴、ガットに羊の腸を張った篩や木製のフォークなどの農具、家の天井や床に敷く葦で編んだブーリヤーなどは地方の手工業者の手によるものが多かった。これは域内分業として発達したものであり、手工業者は〈商業・手工業村〉に工房をもっていた。ここには鍛冶と

染色の店が必ずあったし、ファターバード村のように多様な手工業の職人が集まっていた村もあった。またザルガンのブーリヤー工業やファターバード村のフェルト織のように多くの工房をもち特産品として域外に移出された手工業品もあった。ただ、1960 年代になると域外から運ばれてきた工業製品が村落域を席卷するようになり、この過程で、手工業は次第に衰退していった。

衣料品や食器、ランプなどの工業製品、タバコ、塩、砂糖なども域外から持ち込まれた。衣類は都市の工業製品と輸入品からなり、すでに 19 世紀末にはイギリス製品が農村でも消費されはじめていた⁷。また、鍛冶職人や染色職人が村の住民の需要を満たしていたとはいえ原料は域外から供給され、農産物も域外に多く移出された。この点でマルヴダシト地方の商業は州都シーラーズを中心とした地域市場と密接に関係し、すでに不完全な国民市場の一部を構成していたといつてよい。

このことは〈商業・手工業村〉の立地からもわかる。図 9 にみるように、商業的機能をもつこれらの町や村は谷平原に均等に分布せず州都シーラーズから延びる幹線道路の沿線とその近辺に集中している。〈商業・手工業村〉であるザルガン、ケナーレ、ファターバードはシーラーズから首都テヘランに向かって伸びる幹線道路沿いに、またハラメとバンダーミールはこの支線上に位置している。幹線道路から離れた周辺部に〈商業・手工業村〉はなく、商業活動において村々からのアクセスよりも州都シーラーズからのアクセスの方がより重要であったことを示唆している。シーラーズとの関係から交通の結節点にある町や村が商業センターに発展していたのである。

2) 〈商業・手工業村〉と村落

農村市場は村々の農民の経済を基礎に成り立っていたが、村自体は 80 km の範囲に広がりをもって分布していた。一方、〈商業・手工業村〉はいずれも幹線道路沿いに偏在していたから、村からの距離が非常に大きかった。当時の交通手段はロバか徒歩であり道路の状態も悪かったことでアクセスはきわめては悪かった。道路は粘土質のため乾季には表面を土埃が粉状に数センチも覆い、また冬から春にかけた雨季にはぬかるんでしばしば通行不能となり村によっては交通が遮断されることもあった。このため近隣の村以外は村の住民が〈商業・手工業村〉を日常的に訪れることは不可能であった。たとえば、もっとも近い〈商業・手工業村〉までの距離が 30 km 近くあるボレノウ村の場合、村民が訪れるのは年にせいぜい 1, 2 回に過ぎなかった。つまり、村の住民にとってこの商業センターが小麦を売り必需品を購入する直接的な商品交換の場となっていた訳ではなかった。もちろん、〈商業・手工業村〉を訪れた時にはこの町や村の商店で取引を行ったが、日常的にはさまざまな商人が媒介する形で商業センターである〈商業・手工業村〉と関わったのである。

では、マルヴダシト地方における商品交換のシステムにはどのような特徴がみられたのだろう

か。市場の構造を理解するうえで、まずこの地方には定期市の発達がなかったことを確認しておく必要がある。イランでは定期市は限られた地方に発達し、この典型がイラン北部のカスピ海岸地方にみられた。この地方では農村地帯に定期市が発達し、市の開催日をずらすことで地域的な定期市網が形成されていた。定期市には農民など村の住民、手工業者、商人などが集まり域内の農産物や手工業品が交換され、また外來の商品が商人によってもたらされ取引された⁸。

定期市が発達した地域にはそれをメリットとするいくつかの要素が必要である。その一つは集落間の距離が比較的近く、市へのアクセスが比較的良いという地理的かつ社会的な条件である。交通手段が徒歩やロバなどに限られている場合にはこの点はとくに重要である。また一つには商品交換の密度が高いことである。人口密度が高くかつ農民が商品化する農産物の量が多いことが必要であり、これには地主による余剰の収奪が激しくないことも関係する。人口密度が高く農民が交換できる農業余剰が多ければ商品交換の密度は高く、商人や手工業者も集まりやすい。しかし、当時のマルヴダシト地方はこのいずれをも満たしていなかった。集落は分散し人口密度が相対的に低く地主の収奪率も高かったのである。ただ、定期市が存在しなかったのはマルヴダシト地方に限らない。イランの乾燥・半乾燥地の農業地帯では定期市のみられた地方の方がまれであった。

マルヴダシト地方の場合、近隣の村を除くと〈商業・手工業村〉へのアクセスが著しく悪くしかもこれを補う定期市網も発達していなかった。では村の住民は農村市場とどのように関わったのか。ここで定期市に代わる役割を果たしたのが村々を訪れる仲買人や巡回商人、また商品交換を媒介する村の店舗商人であった。村の住民は自ら〈商業・手工業村〉を訪れることもあったが、日常的にはこれらの商人を通して市場と関わったのであり、次にこの地方の商品交換のシステムをボレノウ村とヘイラーバード村の調査事例をもとに具体的にみていくことにする。

ボレノウ村の住民が主に訪れる〈商業・手工業村〉は距離にして 30 km 離れたコル川流域のバンダーミールであった。ロバで往復 2 日の行程にあり訪問はいわば旅であったから、訪れる頻度は家族当たり年に 1, 2 回に限られていた。とくに女性と子どもはめったに訪れることはなく、村とその周辺のみが彼らの世界であったといつてよい。

バンダーミール村には小さな商店と職人の工房が 40 余りあり、村の住民は 2 つの目的でこの村を訪れた。一つは、日用品など必需品の購入と農具の調達・修理である。農具は鍛冶屋で手に入れた修理を依頼した。日用品は村に一つある店や村を訪れる巡回商人から買うことができたが、品数が少なくかつマージンが大きかったことでバンダーミール村へ直接出向くメリットがあった。

目的のもう一つはバンダーミール村に複数ある水力製粉所の利用である。製粉は村でも人力で可能であったが手間がかかった。このためバンダーミール村を訪れるときは小麦をロバに積み、まず水力製粉所でこれを製粉し、その後に商業地区にある店を回って必要な日用品を購入した。この際、現金ではなく小麦で支払われた。小麦が通貨に代替し、日用品などの購入の手段として

使われた。

バンダーミール村からポレノウ村とは反対の方向に 25 km の位置にあるイスマーイールアーバード村の場合もほぼ同じである。農民からの聞き取りによると、この村は雨季には粘土質の道がぬかるみ外部と遮断され、雨季の前や後に小麦を馬に積んでバンダーミールまで出かけたのである。

3) 村の商店

〈商業・手工業村〉を直接訪れる以外に、村の住民はどのような方法で商品交換を行ったのか。その一つが村の店舗商人を介しての交換である。谷平原に分布する多くの村には日用品等を商う店舗商店が存在した。人口が少ないことで商店をもたない村もあったが近隣の村には必ずあり、ここで日常的に買物をすることができた。商店は通常、集落の広場や道路に面した一角にあり、扱われた商品は村民が必要とする日用雑貨や食料である。

地主制の時代、地主は「村の所有者」であり、村の商店も村の住民の生活に便宜を与える目的で地主によって置かれ、管理された。日用品などを扱う商店は地主が村経営を行う上で必要な要素であったといつてよい。テヘランから約 20 km 南にある人口 341 人 (1959 年) のターレブアーバード村の場合、村には商店が 2 つあり、経営者である商人は地主の許可のもと地主が所有する日干しレンガ作りの家に店を構え、地主に賃借料を支払っていた⁹。当時、村の店舗商人は比較的豊かな階層に属していた。商店で売られる商品はテヘランよりも価格が 3 割程高く、このため村の住民からは好意をもたれていなかったが、テヘランが遠くめったに訪問できなかったため村民はこの店で買わざるを得なかった。

ヘイラーバード村やポレノウ村の場合も日常的には必需品を村の商店で購入した。商人は仕入れのために〈商業・手工業村〉をしばしば訪れ、この際、村の住民から注文も受けた。往復に 2 日を要する〈商業・手工業村〉を訪れることができない住民に代わって商品を調達する便利屋としての性格も兼ね、商品交換の仲介者として機能していた。

しかし、20 年ほど経過した 1972 年のポレノウ村ではこうした村の商人への依存度はかなり低下していた。当時すでに定期的乗合自動車を通いはじめ村の住民もしばしば商業センターを訪れるようになっていた。乗合自動車も村の住民の依頼を受け手数料をとって売買の仲介役を果たした。このため、衣料品、靴、台所用品など値の張る商品は割高な村の商人から買うことが少なくなり、この商人が扱う商品も消耗品と食料品に限られ、販売額も減ったことで小分けにして切り売りもされタバコを一本売りがされていた。以下は 1972 年に村の商店で扱っていた商品だが、商人の村での経済的位置は大きく低下していた。

雑貨： マッチ、塩、タバコ、砂糖、茶、ランプの芯や油

農産物： 果物、じゃがいも、葉野菜、米、卵

このように、モータリゼーションは村と商業センターの距離を縮め、商品交換の形は徐々に変

化していったが、少なくとも徒歩やロバが交通手段であった 20 世紀半ばまでは村の商店は商品交換に重要な役割を果たしていた。

注目すべきは、この商店では小麦が支払手段となっていたことである。収穫期に小麦で支払う前貸しも一般的であった。とくに女性は小麦を抱えて店を訪れ、小麦と交換の形で消耗品や食料品を買った。このため店には代金として受け取る小麦を入れる大きな箱が置かれていた。

4) 仲買人・巡回商人

商品交換のもう一つの形態は定期・不定期に村を訪れる商人を媒介とするものである。この商人は取引の性格から 2 つに分けられる。一つは農産物や家畜の買い付けに村にやってくる商人や仲買人であり、また一つは日用品や食料品等を村の住民に売る目的でやって来る巡回商人である。

小麦と夏作の砂糖ダイコン・綿花など地主との分益で農民が手にした作物のうち、砂糖ダイコンや綿花のような工芸作物は地主を介して販売することが多く、代金を貨幣で受け取るほかに小麦で受け取ることもあった。一方、小麦は農民によって村々を訪れる穀物商に販売された。収穫期には麦価が低く、ヘイラーバード村の場合、村長の指導で必要な分をまとめて販売したが、ポレノウ村については販売方法は確かではない¹⁰。ただ、小麦は村の住民にとっての重要な食糧であるため自給分を確保する必要がある、これ以外的小麦も収穫時にすべて販売することはなかった。理由は、一つに端境期には価格が 20% 前後上昇するため借金の返済などで急ぎ売る必要がない限り収穫時の販売を抑えたことによる。また一つは小麦が貨幣に代替し日用品の購入等に支払い手段とされたことが挙げられる。

羊やヤギは通常は村を訪れる仲買人に売った。仲買人は不定期にまた幹線道路沿いで定期的に開かれる家畜市に合わせて村々をまわり、個々の農家から 1 頭、2 頭と買い集めた。とくに犠牲祭には都市の需要が急増し、仲買人の村を訪れる回数も増えた。村の女性が織る絨毯もまた買付けに訪れる仲買人に売られた。仲買人は出来上がった絨毯を品定めして安く買い叩き、マルヴダシト地方の〈商業・手工業村〉や州都シーラーズのバザールに持ち込んだ。

一方、村での販売を目的とした商人はロバの背に商品を積んで村々を廻った。扱う商品は衣料や日用雑貨であり、村の商店の品揃えが貧弱であったことで需要があった。また野菜や果物を商う商人も村を訪れた。ジャガイモ、ブドウ等、村で生産されていない作物が持ち込まれたが、これら作物を栽培する村の農民や非農民であることが多い。販売目的で村々を巡回する商人はいずれも零細であった。

1972 年から 73 年にかけて 5 ヶ月間滞在したポレノウ村での観察によると、販売目的で村を訪れた商人は、ブドウやトマト、ジャガイモなど果物や野菜を扱う商人、女性の衣装のための布地を扱う商人の順で多い。その他、女性の装身具、村の商人と競合する日用雑貨を売る商人も訪れ、短時間滞在して村から離れた。

こうした巡回商人への支払いも小麦であることが多い。1972 年にはモーターバイクで訪れる者もみられたが 1950 年代はほとんどがロバを利用し、小麦で支払いを受ける商人は代金として得た小麦を入れるための袋をロバに振り分けにしていた。

図 11 村々を巡回しブドウを売る地元の商人

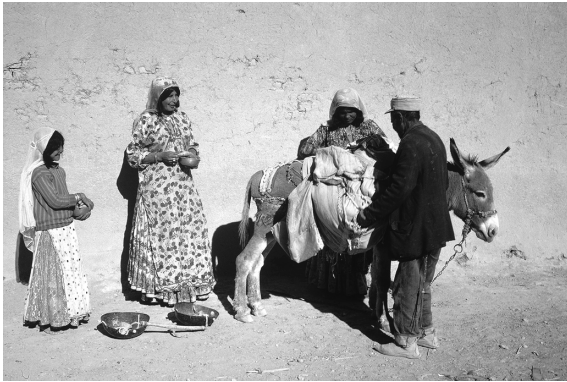


図 12 ジャガイモを商う巡回商人（小麦と等量で交換している）



このように村を訪れる商人や職人を通して商品の交換が行われた。移動を徒歩やロバに頼っていた時代には、〈商業・手工業村〉へのアクセスが悪く、とくにこの間の距離が大きい村では住民が日常的に訪れることができなかったものであり、仲買人や巡回商人が村を訪れ住民の商品交換に一定の役割を果たしていた。

モータリゼーションが発達し商業センターとの実質的な距離が縮まった 1970 年代にもこうした商人は村を訪れた。穀物商はトラックで村を訪れ小麦を買い付けたし、絨毯の仲買人も個々の農家を訪れて生産者である女性と交渉して買った。しかし、アクセスの改善は村の住民により有利な取引のチャンスを与えることになり、町まで出かけて日用品等を買うようになった。これにより村の店舗商人や巡回商人の存在意義は薄れていった。

職人集団もまた村を訪れた。調査で確認できたものとしては篩の製造・修理を行う職人集団と芸人集団がある。手工業者は〈商業・手工業村〉に店舗や作業場を構えていることが多いが、篩作りは地域から疎外されたよそ者の特殊な集団であり、村を巡回して製品を売り修理をした。ボレノウ村の観察では、小麦の収穫作業が終わった 9 月に数頭のロバにテントや道具類を積んで移動し、集落から 200 m ほど離れた麦の刈跡地にテントを張った。ここで近隣の村の農民にヤギの腸で作るガットを張った篩を売りまた注文によってこれらを修理し、2 日ほど滞在してテントをたたんで移動した。

芸人もまた村を訪れた。彼らは町に住み、小麦の収穫後に村で行われる結婚式を盛り上げるために招かれた。サーズオノガレ（笛や太鼓の意味）と呼ばれるこの集団は余興の芝居や踊りを披露し祝儀をもらった。

4. 〈商業・手工業村〉バンダーミール村

すでにみたように、商業や手工業のセンターとして機能していたのは州都シーラーズからの幹線道路とその支線沿いにある〈商業・手工業村〉である。農民経済を基礎とした農村市場は、大土地所有制の下で地主経営が地方を覆っていた20世紀半ばまではその規模が小さく、したがって商業と手工業のセンターも小規模なものであり小さな町や村の域を出るものではなかったのである。では、これら〈商業・手工業村〉はどのような構造と機能をもっていたのか。ポレノウ村の住民がロバに小麦を積んで訪れたバンダーミール村の事例でみることにする。

図9にみるように、バンダーミール村はシーラーズからテヘランに向かう幹線道路から分岐した支線が谷平原を縦貫するコル川と交差するところにある。コル川にはAD 960年頃に建設された5つの堰があり、近年まで堰から分水された水路が灌漑水利に利用されていた¹¹。バンダーミール村はこのうちの最大の堰、バンダーミール堰を挟んで集落が形成されている。堰には幅員が4mほどの橋が川を跨ぎ、川を渡る交通の要衝として19世紀から20世紀に書かれた旅行記にもしばしばこの村の名前が出てくる。また、この橋は夏の放牧地と冬の放牧地の間を移動する遊牧民の移動ルートに当たり、春と秋の季節に多くの遊牧民の集団がこの橋を渡って移動した。

図14はバンダーミールの堰と集落を俯瞰した1960年代後半の図である。20世紀半ばには周辺の村と比べて相対的に大きな人口1000人弱の村であった。1950年頃には地方の有力地主がこの集落と1200ヘクタールを越える土地を所有し、村は商業センターであると同時に農業村でもあった。

商業地区は集落の一角にあり、この建物も地主が所有していた。ある古老の記憶によると1940年代には40以上の店舗が並び非常に賑わっていた。店舗は屋根で覆われた通路に並び、小規模ではあるが都市のバザールと構造的に似ていた。またこの小バザールの一角にはこの村を訪れる外来の商人や村々からやってきた人たちが宿泊するメフマンサライ（旅籠）が配置されていた。

古老の話などを総合すると、1940年代当時、バンダーミールの商業地区の店舗の構成はおおよそ以下のようであった。

- ① 日用品一般を扱う雑貨店（油、ランプ、紐、石鹼、塩、砂糖、石鹼、台所用品など）
- ② 衣類を扱う雑貨店
- ③ 穀物商

図13 バンダーミール堰

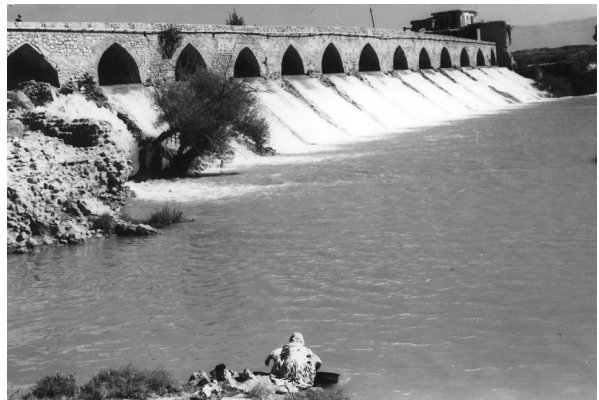
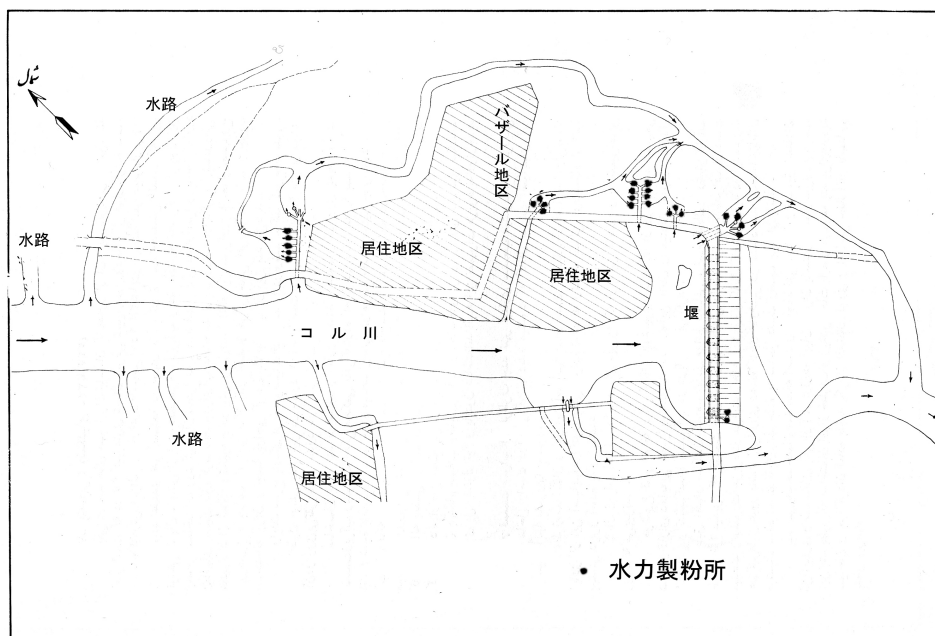


図 14 バンダーミール村落と堰の俯瞰図 (1950 年代)



出所 Gholamreza Kuros, āb va Fanābiārī dar Iran Bastan (『イランにおける水と水利技術』), Vezarat āb va Bargh, 1971, p. 268

- ④ 絨毯商
- ⑤ 鍛冶屋
- ⑥ 染色屋
- ⑦ 八百屋, 肉屋
- ⑧ 理髪
- ⑨ その他の店舗

小バザールは活況を呈していた。商店の経営者には同じく商業センターの一つであった近隣の町ザルガンの出身者も多く、また商店主の 1 人が 1960 年代はじめにバンダーミール村の 300 ヘクタールの土地を購入したことから窺えるように、商人の多くは村の比較的富裕な階層に属していた。

村には外部から商人や村の住民など多くの人たちが訪れた。村々を定期、不定期に訪れる巡回商人や村の店舗商人はここで商品を仕入れ、仲買人は村で集めた絨毯を持ち込んだ。遠方の村々の住民もときどき訪れて日用品などを購入した。村では小麦が貨幣に代替していたから、これらの訪問者は貨幣だけでなく小麦も持ち込み、商品と交換した。一方、州都シーラーズからは農村の需要に応じた工業製品、砂糖、塩、油等がもたらされ、小麦など農民の余剰農産物の一部もこの商業地区を経由して都市に送られた。したがって、バンダーミール村は小規模ながら消費物資と農産物の集散地として、また手工業品の生産、加工、修理のセンターとして機能していたので

図 15 バンダーミールの染色店 (1974 年)



図 16 水力製粉の水車と製粉風景



ある。

この村に多くの人々が集まったのは交通の要衝に位置し商業地区があったことに加えて、水力製粉所が存在したことが関係している。バンダーミール堰は水位落差が 12.5 m あり、1950 年代にはこの落差による強力な水圧で水車を回転させる 28 の水力製粉機が稼動し、マルヴダシト地方における最大の製粉のセンターであった。

水力製粉の水車は刻みの入った上臼と下臼とを重ね上臼を回転させることで製粉をする回転方式で、石臼は直径が 100 cm ほどの大きさがある。ヴルフは『ペルシアの伝統技術』のなかでシーラーズ地方の水力製粉の処理能力について記している¹²。これがバンダーミールの事例かどうかは不明だが、水車は 1 分間に 164 回転して 10 馬力を生み、1 時間に約 150 kg の穀物を処理している。水の少ない乾季には処理能力

は減少し、動力が 8.5 馬力、6.5 馬力、4.5 馬力に減少すると、穀物処理能力もそれぞれ 128 kg、96 kg、68 kg に減少すると述べている。ここからバンダーミール村の処理能力を計算すると、仮に 1 つの水車が 1 時間に平均 80 kg を処理し、1 日 24 時間、年に 250 日稼動すると、28 の水車で年間 13,440 トンを処理することになる。

一方、古老の話では 1 つの水車は 3 人交代で 24 時間稼動し一日に 500 kg ほどが製粉された。28 の水車がそれぞれ年間 300 日稼動すると、1 年に 4,200 トンの小麦を製粉する計算になる。1 頭のロバが 120 kg の小麦を運んでくるとすると、製粉能力についてのヴルフの計算では 11 万頭、また古老の話からの計算では年間で延べ 3.5 万頭のロバが小麦を積んで村の住民や商人に引かれてやって来たことになる。ここから 30 km 離れたボレノウ村の農民もロバに小麦を積んでバンダーミールで製粉し小バザールで買い物をしている。マルヴダシト地方の周辺部の村からも住民や商人をひきつけここに商業や手工業のセンターとして栄えた理由の一つが水力製粉所の存在にあった。

5. 小括 1950 年代までの市場構造を規定する歴史的條件

以上、マルヴダシト地方の市場構造をみてきたが、これをイランの歴史の中で位置づける必要があろう。

まず、この歴史的背景として 20 世紀前半期における地域社会の構造を確認しておく必要がある。カージャール朝の 19 世紀後半期のイランでは、土地は国有、権利の主体である国家が官僚機構を通して村落域に権限を及ぼし徴税することを統治上の理念としていた。しかし現実には、都市に居住する官僚、部族長、商人などの名士層によって村落域の土地が領有され、また財政難から国有地が売却され私的な土地所有が展開していた。都市エリートは村を単位に土地を所有し、村を支配・管理した。マルヴダシト地方においても、村々は都市のエリートによって所有され、都市が村落域を所有するという関係にあった。しかし一方で、19 世紀後半には商業的農業が展開し、都市エリートは村を自らの直営農場に編成し、人格的にも地主に従属していた村の農民を労働力として商品作物の生産を行っていた。地主は農産物の商品化を目的に村を所有し経営していたのである¹³。

1906 年の立憲革命後にイランは近代化の過程をたどる。中央集権化を進め近代化をはかるレザーシャーの時代になって、都市のエリート層の多くが交代し、土地所有も新体制における新たなエリートに移ったが、都市と村落域の關係に大きな変化はなかったといつてよい。つまり、商業的農業を目的とした都市エリートによる村の所有と直営地経営という構造は基本において 1950 年代まで続いた。村の農民は前近代的な地主制のもとで農業余剰を収奪され、農業余剰の多くは都市に運ばれた。村落域にいたのは自由を制約された貧しい農民であり、マルヴダシト地方のオアシス農業地帯は都市に所有され支配された村々の集合であった。したがって、農民に残された余剰をもとに成り立つ農村市場は狭隘であった。日常の生活と生産に必要とされる最低限の商品が農産物等との交換で地方の市場で取引されたことから商品交換の場であった〈商業・手工業村〉もまたその規模が小さかったのである。

都市が村落域を支配・所有したことでこの〈商業・手工業村〉もまた都市のエリートである地主によって管理されていた。バンダーミール村の小バザールは地主の所有であり、ここに店舗を構えた商人は地主に権利金や賃貸料を支払った。また村に 28 ある水力製粉所も地主によって所有され、ここで働く労働者も農民同様に地主の管理下にあった。もっとも商業活動そのものが管理されていた訳ではないが、商業においても地主は所有を通して余剰の一部を収奪したのである。

第二に、20 世紀前半期は工業化が国家主導で進められ、村落域においても商品経済化が徐々に進み、これが農村市場にも影響を及ぼしはじめていた時代であるということである。貨幣経済がいつどのような形で村落域に広がったかについては知りえないが、少なくとも 1950 年頃には商品交換に通貨が使われていた。ただ、村の店舗や巡回商人に小麦で支払をしていたし、ポレノ

ウ村の農民の事例でみたように〈商業・手工業村〉を訪れるときにはロバに小麦を積み小バザールでは小麦や小麦粉で支払をしていた。小麦も通貨に代替していたのである。とはいえ 20 世紀半ばには、自給的側面を残しながらも商品経済化しており、商品交換に使われた小麦は実質的に貨幣の役割を果たしていた。

村の住民が地方の市場で手に入れていた工業製品は〈商業・手工業村〉で生産される手工業品の割合がまだ高かったが、地域外から供給される工業製品も農村市場で取引され、衣類に関しては 19 世紀末にすでに輸入品も農村で使用されていた。〈商業・手工業村〉が都市シーラーズとオアシス農業地帯の村々との接点に立地していたことからわかるように、農村市場は閉鎖的に成り立っていたのではなく不完全な国民市場の一部を構成していた。

本論文で描いてきた 20 世紀半ばにおけるマルヴダシト地方の市場構造は、以上 2 点を歴史の条件としていた。1960 年代になるとこの条件が大きく変わり、市場構造も大きく変化することになるが、この点については第二章で詳しく述べることになる。

二 1960, 70 年代における農村市場とマルヴダシト市の発展

1. マルヴダシト町の拡大と地域市場

1) 地域市場の拡大とマルヴダシト市の発展

一章で詳しく述べたように、20 世紀半ばまでのマルヴダシト地方は、広大なオアシス農業地帯を抱えているにもかかわらず地方の市場は規模は小さく、村落域の農民が関わる〈商業・手工業村〉も十分な発展をみることがなかった。しかし、1960 年代になると農村市場は急速に発展をみせ、農村市場の中心となる新たな町が登場する。この町はマルヴダシト地方のほぼ中央、幹線道路沿いに忽然と現れ、〈商業・手工業村〉の機能を吸収して短期間に数万の人口を抱える都市に発展した。この結果、それまで地方の商業活動の重要な場であった〈商業・手工業村〉は役割を終えて衰退過程をたどることになる。

この新興の町は、1935 年に製糖工場が設立されたのを機に従業員の住宅と関連する商業や施設をもつ町として生まれ、歴史は新しい。1950 年代に入ると、商人や手工業者が徐々に移住したことで店舗数が増え、町の性格も工場町からマルヴダシト地方の商業および工業、行政のセンターへと変化した。さらに 1966 年には人口 8 万弱の地方の中核都市へと変貌を遂げ、市に昇格した。

この時代、都市の発展は全国的な傾向としてみられた。表 1 にみるようにイランの都市人口は 1950 年代から 70 年代まで年平均 5 % 前後の増加率で増えている。これと比べてマルヴダシト市の成長率はかなり高く、1956 年からの 10 年間は 11% である。これは基準年における人口が少なかったことも関係しているが、10 年単位の増加分も 1956-66 年が 16,000 人、1966-76 年が

表 1 マルヴダシト市と全国の都市人口の年平均増加率の推移

	1956-66	1966-76	1976-86	1986-91	1991-96
マルヴダシト市	11.0	7.1	4.6	3.1	2.0
全国 (都市部)	5.0	4.4	5.4	3.5	3.0

(出所) イラン統計センター『イラン統計年鑑 1998/99』

54,000 人と大きく、発展が急激であったことがわかる。したがってこの人口増加は社会増によるところが大きく、地域内外の町や村からの移住や遊牧民の定住の形で多くの人々がこの町に流入した。

イランの多くの都市では、人口増加は産業構造の変化による都市の雇用増や都市と農村の所得格差によるところが大きい。この点でこの町も例外ではない。ただ、この急激な人口増をもたらしたのが農村市場の拡大によるところが大きいという特徴がある。農業部門の生産力の発展と農村社会の制度改革が深く関係した。この点でとりわけ重要であったのが 1960 年代に実施された農地改革と農業の近代化である。

イランの経済は第二次世界大戦後もしばらく停滞状態にあった。しかし 1950 年代後半になると、冷戦体制下のアメリカによる戦略的な援助や民間投資が活発化したことで経済は上向き、1960 年代に入ると高い経済成長をみせる。これには石油生産量の増大や工業化の進展によるところが大きく、年平均 11.5% の高い経済成長率によって経済規模は 10 年間で実質 2 倍以上に拡大した。農業部門をみると、1960 年代の前半期はまだ停滞状態にあったが、後半期に入ると生産性が高まり年平均 5% の成長を持続するようになった。これを主要な作物である小麦でみると、生産量は 1960 年代前半期の年平均が 272 万トンだったのに対し、後半期には平均 330 万トンと 20% 以上増加している¹⁴。

この農業部門の成長は農業の機械化や化学肥料の普及など農業関連の投資が増えたことが影響している。イランではすでに 1940 年代に有力地主によるトラクターの導入が見られるが普及は 1960 年代に入ってからである。また、化学肥料も生産体制の遅れから 60 年代に入って徐々に普及がはじまり、こうした農業の近代化が農業生産力の発展を促したのである。

既に述べたように、農地改革によって前近代的な農業制度が廃止され、農民を自ら土地を所有する農業経営者とした。また、旧地主の農民への譲渡を免れた土地に対しては、農業機械を導入した企業的な農場経営への衣替えが強制された。これにより農業生産面でのインセンティブが高まり、とくに企業的な農場経営者は農業の機械化等の農業投資を進め近代技術の導入が加速された。一方、農民は自ら農業生産の主体となり商品作物生産者として直接的に農産物市場に参加するようになった。

国家事業として進められた地域開発も農村市場の発展に寄与した。イランにおける最初の包括的な開発計画である 1962 年に始まる 5 ヶ年計画 (第 3 次) では、総予算の 21.5% が農業・灌漑水利開発に振り向けられマルヴダシト地方も開発の一拠点となった。開発事業はオアシス農業地

帯という地域の特性から水利事業を中心に進められ、さらに農業関連のアグリビジネスに向けられた。これにより雇用と消費が増え、また灌漑農地の増加と農業の集約化の可能性が開けたことで農業生産力は高まることになった。つまりマルヴダシト地方の市場は、一つに農地改革による制度改革と農業の近代化によって、また一つに国民経済の発展を契機にその規模を大きく拡大し、地方経済のセンターたるべき都市の発展を促したのである。

2) 農地改革と農民の所得増

農地改革が農業生産力を高める契機となったのはどのような理由によるのか、具体的な事例でみていくことにする。

農地改革の第一点は、地主所有地の農民への譲渡にある。ヘイラーバード村の場合、農民が労働に従事してきた地主経営の農場の土地のすべてが農民に譲渡された。しかし、地主の所有する土地のすべてが譲渡の対象となった村は全体の1割程度に過ぎず、9割の村は、翌63年に追加された条項の適用を受け、地主所有地のほぼ3分の1が譲渡されたに過ぎない。ポレノウ村の場合、地主は829ヘクタールの土地を所有していたが、農民に譲渡されたのはこの34%に相当する298ヘクタールであり、残りの531ヘクタールは地主所有のままであった。これは、地主制の時代に地主と農民が生産物を分けた分益比率で土地を分割するという条項の適用により、地主に大きく譲歩した内容となっている。このため、村の農民が耕作する農地は地主制の時の3分の1に縮小することになったが、伝統的な農業制度が廃止された点では大きな意義があった。農地改革は農民解放としての性格も帯びており、農民は土地所有農民として自立した経営者となることができた。

一方、地主が譲渡を免れた農地に対しては旧来の地主経営を続けることが禁止され、農業の機械化による近代的な農場への衣替えが求められた。地主は自らが農場を運営するか第三者に貸与するかを選択したが、いずれにせよ経営を近代化する必要があった。この結果、オアシス農業地帯には領主直営農場を想起させる地主経営に代わって、農民が経営の主体となった村と近代化した農場が登場し、農業生産力の発展を妨げていた制度的な制約は除去されることになった。

表2 ポレノウ村の農民1人当たりの収入と支出

粗収入 6.0 トンの内訳	
小麦の収穫量	3.0 トン
綿花	販売額 15,000 リアル（小麦換算で 1.8 トン）
羊・ヤギ	それぞれ 2 頭ずつ販売すると、6,000 リアル（小麦換算で 0.8 トン）
じゅうたん	1 m×1.5 m のサイズ 1 枚 4,000 リアル（2 枚の小麦換算で 1.1 トン）
生産コスト 1.6 トンの内訳	
肥料代、農薬代、賃耕、脱穀代、種代、輸送代、水代	
	10,460 リアル（小麦換算で 1.4 トン）
じゅうたん（羊毛代、染色代）	2,260 リアル（小麦換算で 0.3 トン）
羊・ヤギ（農家が作る大麦が家畜の飼料となる）	

多くの村で農民は分益比率にもとづいて農地を取得したため農民の農業収入は計算上は農地改革の前後で変化がないことになる。実際に農地改革後しばらくは、農民に経営の経験がなかったこと、村において耕作規制が残っていたこと、また経営のための資金が不足していたことで農業の生産性は低いままであった。しかし、自ら経営の主体になったことで農民の生産意欲は徐々に高まり、化学肥料の投入やトラクターなど農業の機械化をすすめたことで実質的な収入は徐々に増加した。

これを1973年のボレノウ村の事例でみたのが表2である。小麦と綿花、それに家畜と絨毯の生産を加えた農家の収入は、小麦換算で6.7トンであった。ここから生産のためのコスト1.7トン差し引いた純収入は5.0トン、さらに小麦の自家消費分である0.8トン（成人1人の消費量が200kg、農家の家族数が成人換算で4人とする）と村のコミュニティーの維持費等を差し引くと3.5トン程度となり、これが消費と貯蓄に向けられた。1950年頃の地主制下の村で2.0トンであったから1.5倍に増えた計算になる。

地主所有地すべてが村の農民に譲渡されたヘイラーバード村の場合、収入はさらに大幅に増加し、粗収入ではボレノウ村の2倍近い12.0トン、経費と自家消費分を差し引くと6トン以上となり農地改革前の3倍に増えている。

一方、地主が農民への譲渡を免れた農地は面積にしてマルヴダシト地方全体の6割を占め、この農地では地主また借地経営者によって近代的な経営が行われていた。50ヘクタール前後から1000ヘクタールを超える大規模なものまであるこの農場の経営者は資金力があることで積極的に農業投資をおこなった。ボレノウ村の旧地主が経営する農場の場合、1972年時点で、単位面積当たり施肥量で農民の10倍、灌漑水量で2倍に及び、小麦の単収で2倍以上と高い生産性を実現していた。また、農地の利用率も高く、ポンプ揚水井戸の掘削によって灌漑水量を増やしたことで綿花や砂糖ダイコンなどの夏作の作付け比率も村の農民よりかなり高かった¹⁵。

農業が近代化し農業生産量が増えたことで、農業投入財や日用品等への農民の支出も増え、農村市場の拡大をもたらした。農地改革以前には地主は余剰の収奪者として農村市場と関係をほとんどもたなかった。しかし農地改革後はマルヴダシト市が地方経済の中心として発展したこともあり農民だけでなく企業的な農場経営者も地方の市場との関係を深め、余剰農産物が地主によって域外に運ばれ貧しく半自給的な農民の経済を基礎とした農村市場は農民の収入増と農場経営者の参加でその規模を大きく拡大することになった。

図17 ダムの完成にともない建設された農業用水路



マルヴダシト地方の市場の発展には地域開発事業による需要の拡大も大きく関係した。開発プロジェクトの最大の事業は電力開発と農業開発のための多目的ダムの建設、灌漑のための水路網の建設である。1971年にコル川が谷平原に入る入口にダムが完成し、ここを起点とする水路網の建設が進められた。流水量の季節的な変動が大きいコル川の水を貯水し、谷平原に大規模な水路網を張り巡らして灌漑耕地を増やし、また農業の水集約度を高めて地域の農業生産力の飛躍的な発展を図るというものである。水路網が完成するのは1990年代に入ってからだが、1970年代はじめの予定では4万3000ヘクタールがあらたに灌漑農地化し、7万6000ヘクタールを水路からの受益地とすることであった¹⁶。この建設事業は雇用と消費を増やしたことで地方経済への経済的効果は大きく、さらに長期的には灌漑農地を増やし農業の集約化のための基盤を形成することで地域農業の発展に寄与した。ただ70年代はまだ建設途上にあった。

2. マルヴダシト町の発展と地域の市場構造

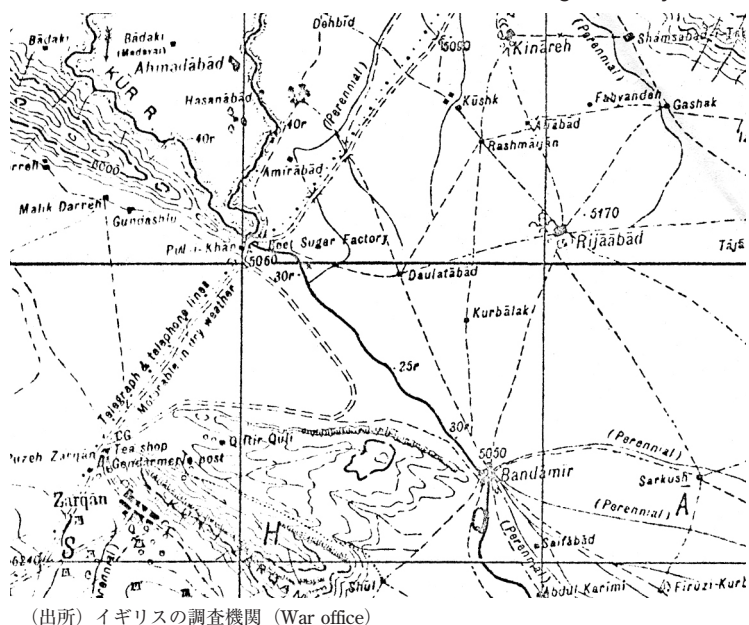
一章で述べたように20世紀半ばまでのマルヴダシト地方の市場は狭隘であり、複数の〈商業・手工業村〉が地方の商品交換の場として機能していた。しかし、1960年代に入ると市場構造の変化と規模の拡大によってこうした〈商業・手工業村〉は衰退過程をたどり代わって新たな地方経済のセンターとしてマルヴダシト町が発展するが、次にこの形成と発展の過程をたどることにする。

マルヴダシト町が位置するところに製糖工場の建設がはじまったのは1932年である。1920年に権力を握り25年に国王に即位したレザーシャーは対外従属を避け経済の自立化を目指して輸入代替工業化を進めた。この工業化の一環としてそれまでロシアからの輸入に頼っていた砂糖の自給を目指して全国8ヶ所に製糖工場の建設が計画された。製糖業は資源立地型の工業であり、工場は砂糖ダイコンや砂糖キビが栽培可能な農業地帯を後背地にもち、かつ交通の便がよいところが選ばれる。広大なオアシス農業地帯を抱え、幹線道路が通るマルヴダシト地方のこの場所は立地上すぐれていたといつてよい(図9)。

歴史を遡ると、20世紀初頭のマルヴダシト地方はまだ遊牧民の勢力が強く政治的に不安定であり、農地は20世紀半ばと比べてかなり小さく新たな農地の開発も遅れていた。レザーシャーの時代になると中央集権化政策のもと地域の安定化がはかられ、遊牧民の定住化とともに地主主導による農地の開発が積極的に進められるようになり、こうした時代背景のもとで製糖工場が建設された。

工場建設のための労働力はラジャーバード村、クーシュク村、ケナーレ村、ラシュマンジャン村、エマードアーバード村、デヘビード村など周辺の村からおもに調達された。しかし農地の開発が進んだことで労働力は不足状態にあり、地主は不足した労働力を遊牧民の定住によって充足した。この地方の村々には遊牧民出身の農民が多く、調査を実施したボレノウ村も農民の多くはこの時代に地主にリクルートされている。

図 18 1940 年の製糖工場周辺 (マルヴダシト町の付近には Beet Sugar Factory と書かれている)



製糖工場は当初予定されていた建設地を変更した経緯がある。10 km 離れたバンダーミール村に予定されたが、農業労働力の不足を危惧した有力地主の反対で建設地が変更された。建設に際しても必要な労働力を欠き、このため 10 代の若い労働者を雇わざるを得ず、また労働力不足からかなり遠方の町から労働者を移住させて労働力の不足を補った。製糖工場が建設された時代は農地の新たな開発が進んだ地主制の展開期でもあったのである。

工場の建設過程からの事情に詳しい古老の話によると、工場が稼動を始めた 1935 年頃の従業員数は 300 人程度でありそのほとんどは周辺の村に住み工場に通っていた。イギリスの調査機関が作成した 1940 年の地図には、現在マルヴダシトの市街地があるところに Beet Sugar Factory と書かれており、工場周辺に町はなく工場の従業員の住宅と従業員のための若干の店のみであったと考えられる。

しかし、1956 年のセンサスでは工場を中心に人口 8,987 人の町が形成されている¹⁷。この数字は周辺の村を含み市街地のみの人口ではない。工場の周りには従業員のための社宅と購買所、診療所が作られ、工場関係の需要で商店などの事業所が徐々に増加し、外部から人口流入によって町が形成されていた。当時の工場の労働者の数が約 400 人、家族を含めると 2000 人前後であり、建設、運送、サービスなど間接的に工場と関係した人々を加えた人口は 3000~4000 人であったろうと考えられる。外部からの移住者には〈商業・手工業村〉であったザルガンやバンダーミール村、またラジャーバード村など周辺の村からの人たちが多かった。したがって、少なくとも 1950 年代半ばまでは製糖工場を中心とした工場町としての性格が強く、町も工場を意味する〈カールハーネ〉と呼ばれていた。ただ、バンダーミール村やザルガン町と同様にマルヴダ

シト地方の農民の商品交換の場として〈商業・手工業村〉の機能も合わせもっていたと考えられる。

工場町として出発した〈カールハーネ〉の町も人口が増加し町の規模が拡大する過程で地方の商品流通の機能を加えて徐々にその地位を高め、1950年代末には他の〈商業・手工業村〉を圧倒して次第に卓越した地位を獲得した。とくに農村市場が拡大する農地改革後に発展が著し

く、この町の発展にはさらに2つの理由がある。一つは、1959年にマルヴダシト地方が郡(Markaz-e bakhsh)に昇格し、〈カールハーネ〉に役所や学校、保健関連の諸施設等が作られたことである。これによりサービス部門の人口が増加し、多様なサービスを受けられることで人々を引き付けた。また一つは優れた立地にある。オアシス農業地帯のほぼ中心、幹線道路沿いに位置し交通の便がよかったことである。この時代、交通手段がロバや馬から自動車に代わりつつあり、交通の要衝に位置することの優位性は高かった。

バンダーミール村やザルガン町などのローカルな商業センターから商人や職人がマルヴダシト市に徐々に移住し、これと対照的に従来の〈商業・手工業村〉は衰退の過程をたどった。バンダーミール村は1950年代半ば頃までは〈商業・手工業村〉として活況を呈していた。郡役所の出張所やホーゼサルバーズィー(兵隊を集める役所)があり地域医療のセンターとして4,5人の医者が駐在する地域の中心であり、商人や村の住民が多くここを訪れた。またコル川の堰の水位落差を利用した水力製粉の水車が28あり製粉のセンターでもあった。しかしその後は衰退過程をたどる。石油を動力とする製粉機(アーセアープ・バルグ)が普及しはじめると製粉を目的にわざわざこの村を訪れる必要がなくなり、村の住民や商人の足は交通の便がよく多様なサービスを受けられるマルヴダシト町に向きを変え、小バザールと水力製粉は衰退していった。1940年代末から製粉所で働いていた古老の話によると、製粉所の仕事は1950年代半ば頃から徐々に減りはじめ、仕事が少なくなったことで彼自身は製粉所をやめて農民になっている。筆者が1973年にはじめて訪れた時には稼動していた水車はわずかに3つであり、小バザールは商店主がマルヴダシト市に移住したことで空き店舗が目立った。経営を続けていたのは染色店4軒、村民の日用小物を商う雑貨店6軒、肉屋3軒、八百屋3軒、自転車などの修理店1軒、農村協同組合の店1軒に過ぎず、活気をまったく失っていた。

ザルガン町の場合も同様である。商人だけでなく手工業者も多くがマルヴダシト町へ移住した。ザルガンの地場産業であったプーリヤー(住宅の天井に張られる葦製の建築材料)の生産者の中

図19 製糖工場と砂糖ダイコンを運ぶ馬車(1974年)



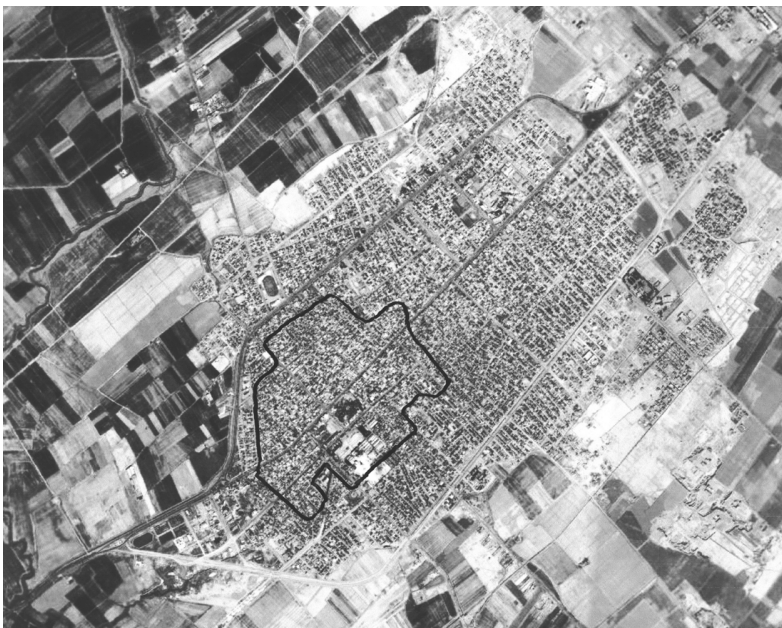
にもマルヴダシト町に移るものも多く、ザルガンから移住した手工業者の工房が集まったマルヴダシト町の一角はプーリヤー街と呼ばれるようになっていた。ただ、ザルガンの町は幹線道路沿いにあったことでバンダーミール村ほどには衰退せず、商業圏は縮小したものの近隣の村々にとっての便利な町として生き続けた。

この点ではマルヴダシト町から 50 km 離れたハラメの場合も同様である。モータリゼーションが進んでも道路はまだ十分に整備されていなかったためマルヴダシト町は相変わらず遠く、周辺の村々からの乗合自動車はマルヴダシトと同時にハラメにも向かい日常的な買物などでの利便さからローカルな商業センターとしての機能を維持していた。

〈商業・手工業村〉の手工業も崩壊過程をたどった。これは外部から各種の工業製品が流入したことと関係する。地域の住民が農具や厨房用品、衣類として用いていた手工業品はシーラーズなどからもたらされる工場製品に取って代わられた。フェルトや素焼きの製品、石鹸の多くの工房を抱えていたファターバード村の手工業は衰退し多くの工房が廃業に追い込まれた。

ただ 1950 年代のマルヴダシト町への発展は、複数の〈商業・手工業村〉からの商業機能の移動によるところが大きく、地方の商業活動の拡大によるものとは必ずしもいえない。しかし 1960 年代になると、農村市場の急速な発展が商業センターとしてのマルヴダシト町の発展に大きく寄与することになる。1966 年には町から市に昇格し、同年のセンサスによると人口 25,498 人、10 年間に 3 倍に増加した。さらに 10 年後の 1976 年には 79,132 人に増え、1000 以上の事業所と店舗を数え、実質的なマルヴダシト地方の政治経済の中心都市へと発展していく。

図 20 1997 年のマルヴダシト市
(線で囲った部分は 1970 年代初めの市域)



3. マルヴダシト町と村をつなぐ乗合自動車

マルヴダシト市が1960年代に急速な発展を遂げたのは農地改革後の農業社会の構造変化と農業生産力の発展によるところが大きいが、一極化についてはモータリゼーションがこれを加速させた。かつて村の住民の交通手段は徒歩やロバであり、1950年代末に至って富裕層の間に自転車普及を始めた。ヘイラーバード村の場合、自転車をもっていたのはキャドホダー（村長）を含む数人であり、1962年に農地改革法が国会で議論されていた時、キャドホダーは情報を集めるためにマルヴダシト町へ自転車を走らせた。徒歩やロバの時代には村からの輸送のコストと移動時間が距離をはかるファクターであり、距離の短い〈商業・手工業村〉が商品交換の場として選ばれることが多かった。しかし移動の手段が自動車に変わると距離よりも便宜性が優先され、ローカルな商業センターとしての〈商業・手工業村〉の存在意義は薄れ、立地で優れ、機能を多様化させていたマルヴダシト市への一極化が急速に進み、役所などの公的施設ができたことでこの動きは加速した。

1974年の筆者の観察では、マルヴダシト地方のほとんどの村にマルヴダシト市と村々を結ぶ乗合自動車通っていた。たとえばマルヴダシト町から30 km以上離れたボレノウ村の場合、

図 21 ポレノウ村に寄る乗合自動車



図 22 ポレノウ村に入る道路



日に1往復するマルヴダシト市からやってくる中古のマイクロバスが村で客を拾った。ボレノウ村に来る乗合自動車の場合、ダム建設にともない建設現場までの道路が舗装された1960年代半ばにマルヴダシト市在住の商人によって営業がはじまり、この道路の沿線と周辺の村々で客を拾った。

またマルヴダシト町から25 km東方のヘイラーバード村の場合、乗合自動車は農地改革が実施された翌年の1964年に走り始めた。村のキャドホダー（村長）が出資して中古の自動車（ランドローバー）を購入し、運転手を共同経営者に運営された。さらに73年には村の別の住民が参入し乗合自動車は2台となった。

この事例からのわかるように、1960年代半ばに乗合自動車による定期便の開通ラッシュがあり、オアシス農業地帯に分散した村々とマルヴダシト市の距離は一気に縮まっ

た。また移動時間が大幅に短縮されたことで、マルヴダシト市を中心とする経済圏は谷平原からさらに外へと外延的に拡大し、この拡大がまたマルヴダシト市の発展を加速させた。この結果、1970 年代はじめには 200 近い村がマルヴダシト町と密接な経済関係をもつようになっていたと推定される。市街地区での観察によると、乗合のマイクロバスのほかに少なくとも 40 のランドローバー、乗用車、小型トラックが村を起点とする乗合自動車として運行し、ほとんどの村で住民が利用していた。

ただ当時はまだ道路網の整備が進んでいなかった。谷平原を横断して伸びる一本の幹線道路とダム建設のために整備された道路以外に舗装道路はなく、砂利が敷かれていない道路も多かった。さらに村々に至る枝道は粘土質土壌のために雨季にはぬかるみ、乾季には表面を粉状の土ばかりで数センチも覆われた。また山際の道は起伏が多く、道路の状況は悪かった。

次に、乗合自動車によって村とマルヴダシト市がどのように結びついていたのか、1974 年時点のヘイラーバード村の事例でみることにする¹⁸。

ヘイラーバード村の乗合自動車は村の住民によって所有され村を起点としていた。早朝に村で客を集め、途中道路際で客を拾いながら町に向った。ただ乗客の輸送だけでなく運転手は村の住民からの買物等さまざまな用事を請け負った。道路は幹線道路に出るまでの 15 km は山際のでこぼこ道であり、町まで 1 時間ほどかけて走った。マルヴダシト市に着くと、商業地区の一角の決まった場所で乗客を降ろす。客は出発時間までの 3, 4 時間で用事を済ませ、同じ場所に集まって車に乗り込み村に戻る。町での用事は、買物、役所や銀行での手続き、診療所での治療などさまざまである。乗客を乗せるのは午前の 1 往復だが、乗合自動車は他の用事のために通常は 2 往復した。村の共同風呂や井戸ポンプのための重油用のドラム缶を選び、その他、村の住民から依頼を受けたさまざまな用事をおこなった。

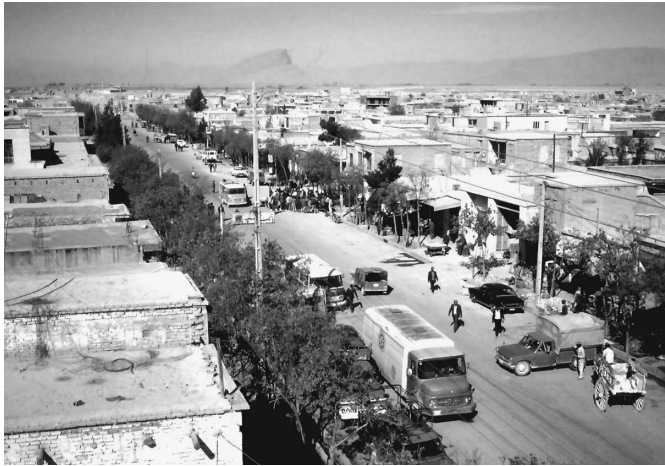
発着所は市街地への村からのルートによっておおよそ決まっている。北西方面からの車は商業地区の北の一角、東方面からは中ほどの街路右側、西方面からは中ほど左側、南方面からは南の一角であり、乗客は用事を済ませた後、乗合自動車を見つけ易いように発着所からあまり遠くない範囲で買物をする。このため発着所の近辺には村の住民にとって馴染みの店があり、ヘイラーバード村の場合、当初、村民と縁の深い雑貨店が数件あった。しかし商店が増えるにしたがってしだいに店を選んで買い物をするようになった。後にみるように商業地区にはさまざまな日用品を揃えた雑貨店が多い。これは村の住民が短時間に日用雑貨などを細かな単位で買い揃える買物のスタイルと関係がある。ただ、衣類や少し値の張る商品については専門店を選んだ。

要するに、1960 年代半ばにおけるモータリゼーションが村と商業センターとの関係を大きく変えることになった。1950 年頃と比べて農民の可処分所得は増え商品経済化も進展しており、乗合自動車はその便宜性から村の住民が町を訪れる回数を格段に増やし物流を活発化させたことでマルヴダシト市の発展に大いに寄与したのである。

4. 1970 年代半ばのマルヴダシト町の都市構成

では、地域のセンターとして発展したマルヴダシト市は都市構成にどのような特徴がみられたのか、1974 年に実施した実態調査から示す。1967 年のセンサスによるとマルヴダシト町の人口は 25,498 人、事業所数は 695 であった。事業所の内訳は工業と公益事業が 171、商業が 417、そ

図 23 1974 年のマルヴダシト市



の他が 107 である¹⁹。1970 年代の事業所に関するデータはないため正確にはわからないが、1974 年時点で優に 1000 を超えていたと思われる。このうち工業は製糖工業を除くとほとんどが修理業や鉄工などの作業所で規模の小さなものであり、商業地区の店舗は小さく零細な商人が多かった。つまり小商品生産者が産業の主な担い手であった。

図 24 は 1970 年代半ばのマルヴダシト市を俯瞰したものである。市街は製糖工場を中心に幹線道路に沿ってほぼ南北におよそ 800 m 伸びている。幹線道路は市街地に入ると道幅が 20 m に広がり、このメインストリートの両側全体が商業地区になっている。また幹線道路と交差していくつの道路や小道が左右に伸び、製糖工場の正門からまっすぐ幹線道路を突き抜ける道路もメインストリートの一部をなし両側が商業地区となっている。

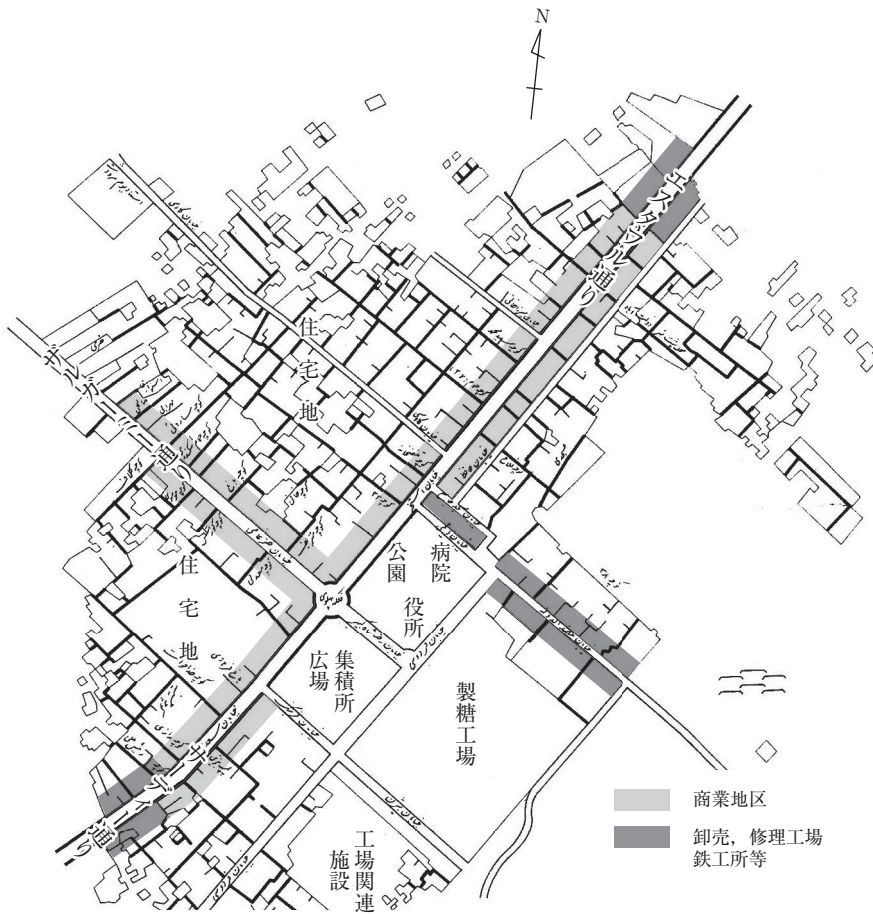
市街地の構成をみるとおおよそ次の 5 つに区分される。

- ① 製糖工場と工場関連施設からなる地区
- ② 市役所、病院、公園など公共施設の集まる地区
- ③ 卸売りと資材関係の店が集中する地区
- ④ 小売店を中心とした商業地区
- ⑤ 住宅地区

町が製糖工場の建設に始まったことから、製糖工場と関連施設が市域のかかなりの割合を占めている。製糖工場の周りには従業員のための社宅や厚生施設など工場に関連する諸施設等がある。また 2 ヘクタールほどの広場が収穫期に砂糖ダイコンを積んだ馬車やトラックが集まる集積場として使われている。ただシーズンオフには多目的に利用され、家畜の定期市もここで開かれる。

製糖工場の正門から伸びるメインストリートを挟んで公園がある。この公園の中心に市役所があり、また一角に診療所と呼ぶべき規模の病院がある。その他の公共施設や公的機関の事務所も

図 24 1974 年当時のマルヴダシト町



この公園の周辺に多く配置されている。人口の増加に対応して後に比較的規模の大きな病院が市域の周辺部に建設された。

製糖工場の北側の複数の通り一帯には、建設資材、自動車修理、農業関連の事務所や作業所が集まっている。建設資材としては、鋼材、木材、石材、レンガ、セメントなどを扱う店と倉庫があり、また自動車やトラクターの修理工場もこの地区に多い。農業関連では化学肥料等の店、農業機械の修理工場、トラクターの賃耕業者の事務所などがある。この地区の事業所は、その業種からもわかるように機械化等農業の近代化や地域開発事業、住宅建設との関連で増加し成長した。とくに農業の近代化は農業関連の産業に加えて、地域経済のさまざまな部門に波及効果をもたらした。また地域開発のための政府による投資も建設関連の産業を刺激したため、この地区は市の外延部に向かって急速に広がった。

商業地区は市街のメインストリート、つまり幹線道路（サーディー通り、エスタフル通り）沿いとこれ交差する街路（ザルガーミー通り）の両側に長く伸び、小売商店の多くがこの商業地区にある

(図 24)。1974 年には、この商業地区の店舗数は、幹線道路沿いに 424、ザルガーミー通りに 113 が確認されている。またメインストリートから内側に伸びた小規模なアーケードが複数あり、これを含めるとこの商業地区だけで店舗数は恐らく 600 前後となり、路地にもわずかながら商店があったからこれを加えるとさらに多くなる。

店舗は、間口が 2.5 m、奥行きが 5 m ないし 6 m の広さを 1 ユニットとし、1 ないし数ユニットの店が道沿いに並んでいる。もっとも間口は、銀行、レストラン、作業場、映画館、ガソリンスタンドなどを除くと 1 ユニットの小さな店が圧倒的に多い。穀物商も商業地区とその周辺に多く、たとえばポレノウ村では小麦は収穫期に村を訪れる穀物商に売却されたが、この村と関係がある穀物商は 5 人で、このうち 3 件は商業地区であるザルガーミー通り、2 件はサーディー通りに店を構えていた。

筆者は 1974 年にこの商業地区の店舗の業種を記録したが（資料 2）、下の表はこれを業種別に整理したものである。

表 3 マルヴダシト町の商業地区の店舗（1974 年）

	店舗数		店舗数
雑貨店	150	電気屋	6
衣類・布	33	ガス器具	2
染色	14	自動車部品、自動車オイル	18
靴屋	11	自転車、自転車部品	10
菓子店	7	銀行の支店	3
八百屋	25	映画館	2
パン屋	15	ガソリンスタンド	1
肉屋	11	鉄工所・ドア	13
穀物店	10	木工所	4
薬屋	3	その他	
レストラン・飲食店	11		

（注）1974 年の筆者の調査による

商業地区のメインストリート沿いに並ぶ 537 の店の内訳をみると、圧倒的に多いのは日用品を扱う店である。なかでも特徴的なのは様々な種類の商品を並べた雑貨店であり、全体の 28% に当たる 150 店に及ぶ。この雑貨店はほとんどが 1 ユニットの小さな店で、主に扱う商品によって日用雑貨、衣料雑貨、食品雑貨の 3 つにおおよそ分類できる。雑貨を扱っているが分類の難しい店も多い。いずれにせよ専門店に分化していないいわば「よろずや」と呼ぶべき店である。

このうち数が最も多いのが日用雑貨の店であり、狭い店内には石鹼、砂糖、ひも、たばこ、洗剤、茶、ランプとその部品など、日々の生活に必要な小物がほとんどなんでも揃っている。こうした雑貨店は村の住民と直接・間接に関係が深かった〈商業・手工業村〉の店舗を特徴づけるものであった。1970 年代のマルヴダシト町がこの伝統的な店の形態を残していたのは、この商業地区が村の住民と関係が強く、農村から乗合自動車で訪れる人々の買物のスタイルがまだ大きく変化していなかったことによると考えられる。各方面から毎日やって来る乗合自動車が運んで来

る村の住民は農地改革前と比べて豊かになり購買力も高まったとはいえ経済的に余裕がある訳ではなく、短い時間に必要な日用品を買い揃えるにはこうした雑貨屋は便利であった。

しかし他方で専門店への分化も進んでいた。衣料品の専門店、飲食店、薬屋、さらにガス、電気など耐久消費財の店も登場しているが、これにはマルヴダシト市の住民の増加と村の住民の所得増による消費構造の変化が関係している。都市住民の着る洋風の衣装に加えて村の女性が着る民族衣装を商う専門店も生まれ、比較的豊かなヘイラーバード村ではラジオやガスレンジ、自転車が徐々に普及し、こうした需要に応じた専門店が増えていたことが観察された。30年後の2006年にこの商業地区で再度観察した時には、商店の数が大幅に増えていたと同時にこの雑貨店の比率は大きく低下していた。この点で1974年は店舗の構成において、〈商業・手工業村〉から近代の商業センターへと移行する過渡期にあったといつてよい。

図25 民族衣装を商う店



かつての商業センターと異なるもう一つの特徴は銀行の存在である。商業地区には3つの銀行の支店がありそれぞれに繁盛していた。銀行の主たる取引相手は、商工業者、農場経営者また町の住民であり、1970年代には村の住民も加わった。ポレノウ村の場合、住民は銀行とはあまり関係がなかったが、比較的豊かなヘイラーバード村の場合、乗合自動車で町を訪れた農民はしばしば銀行を訪

れた。これは作物や家畜の取引に小切手が使われることが多くなったことと、所得が増えたことでの銀行預金の普及により1950年代と比べると明らかに大きな変化である。銀行は近代化した農業経営者へ資金を貸し付け、農業経営における資金面で役割を果たすようになった。ヘイラーバード村の事例では、村で共有のポンプ揚水井戸の建設に際して銀行から融資を受け、また農場経営でもあったキャドホダー（村長）がコンバインの購入に際して融資をうけた。ただ、少なくとも1970年代までは、農民が銀行の融資を受けて農業への投資を行うまでには至っていない。

5. 小括 経済成長と農業近代化へのインパクト

マルヴダシト地方では、農村市場の発展は農地改革を契機とし、政府の農業近代化政策が果たした意義は大きい。農地改革によって前近代的な地主経営農場は廃止され、土地所有者となった農民の経営と旧地主所有地における近代的な経営が生まれ、この結果、地方の商業と工業の中心としてマルヴダシト市が急速な成長を遂げた。

ただ、農地改革が農業近代化の唯一の方策であった訳ではない。すでに農地改革以前に地主に農業近代化の兆しがみられたことである。トラクターが導入され農業の機械化が進む過程で、旧

来の伝統的農法と農民を労働組織に編成した地主経営を桎梏とし、農法を転換し農業経営を近代化し農業制度の改革をこころみる地主が生まれていた。マルヴダシト地方においても一部の地主農業を近代化すべく農場の囲い込みが行われていた。しかし、囲い込みは農場から村の農民の排除を意味したから、こうした村では地主との対立が深刻化した。農地改革がなかったと仮定すると、1960, 70年代のマルヴダシト地方は囲い込みによる企業的な農場が多数登場し大規模経営の農業地帯になったと考えられる。このため、農村では激しい闘争が繰り返されまた多くの農民が都市へ移動することで社会不安が深刻化したであろうことが想定される。

したがって、農地改革はこうした状況が起こるのを回避する効果があった。マルヴダシト地方の村では農民は地主から土地を譲渡されて独立した経営者の道を与えられ、他方で地主も広大な農地の所有が保証されて近代的な農場経営を行うことができた。ここに村の農民経営と大規模な農場経営の2つの異なる経営が生まれることになり、地方の農業発展の道が開けたと同時に、地方における市場の規模を大きく拡大することになった。この点で農地改革を評価することができるであろう。

こうした農業社会における変化は国の経済が大きく発展する時代に対応するものであった。1960年代はイランの経済発展期であり、70年代になるとオイルショックによって莫大な石油収入が流れ込んだ。マルヴダシト地方においても開発投資の資金が流入し、アグリビジネスや水利事業等への公共投資が地方の需要と雇用を生み出した。イラン有数のオアシス農業地帯であることから開発も農業関連の開発が中心であった。こうした地方の外部からのさまざまなインパクトもまた農業社会を変化させ地方の市場の発展を促した。このため、1960, 70年代のマルヴダシト市の発展は農業社会の近代化と農業生産力の発展にともなうものであり都市の構成も多様化した。地方の農業の発展を契機に成長した農業都市としての性格をもち続けていた。

おわりに

本論文は主として1970年代に実施した3回の実態調査にもとづいている。最初の調査は1972年から73年にかけて共同調査として実施され、ポレノウ村に住み込んで村の経済とマルヴダシト地方の地域調査をおこなった。この村では1967年に農地改革が実施されたから、農法や農耕方式等にまだ地主制の名残があった。それまでの地主経営では村の農民は地主の差配の指示のもとで農作業に従事していたため、地主が村から退場したことですぐに自立した農業経営者となる能力をもたなかった。経営のノウハウも資金もなく、農業の方式は地主経営のもとでの農民労働の制度そのものを踏襲したものであった。これは地方の村に共通に言えることであり、本来の自立経営農民が農地改革後すぐに生まれたわけではなかったのである。しかし、農民の共同という形ではあったがポンプ揚水の井戸の設置やトラクターの導入、また普及をはじめていた化学肥料の施用など農業生産力を高める方向での努力がみられ、農業生産量が増え農民の収入も増大した。

一方、それまでの地主は農地改革で農民への譲渡を免れた農地で機械化による近代的な農場への編成を進めて村の農民よりも集約度の高い農業をおこない、1972 年の時点で土地生産性は農民の 2 倍以上に達していた。マルヴダシト地方の農業地帯はこの 2 つの経営形態がモザイクのように分布していたのである。

当時、マルヴダシト市は人口が 3 万を超え、周辺の村や域外から流入する人たちで人口が急激に増えていた。マルヴダシト地方は遊牧民の移動経路にあったことで遊牧民が多く定住した町としての知られており、メインストリートにある商店街はこの地方の村々から訪れる人々で賑わい、新興の町として洗練されない荒々しさをかもし出していた。マルヴダシト市の発展は、農地改革後に農民が直接的な商品作物の生産者となりまた農民の所得が増えたことが主たる理由である。しかし、政府や民間のサービス部門の施設が置かれ商店等の事業所が大幅に増える過程で、かつて州都シーラズと結びついていた地主層もマルヴダシト市との関係を強めこと、さらに 1960 年代後半から始まる政府による地域開発が発展にさらに拍車をかけたことも見逃せない。とくに 1973 年のオイルショック以降、急増した石油収入を財源に開発のスピードが速まったことで、マルヴダシト地方でも雇用が拡大し人口流動が高まった。つまり、1960 年代は地方の構造が大きく変化をし始めた時代であり、調査をはじめた 1970 年代前半期はまさに時代の転換期であった。

ただ、1960 年以前のマルヴダシト地方が停滞していたわけではない。調査を実施したのが農地改革から多くの年月がたっていなかったことで、農民には地主制の時代の記憶が鮮やかであり、さらに当時の年配者は 1940 年前後の時代についても多くを記憶していた。ポレノウ村の場合、村の名前は 19 世紀末の資料にも記録されている。だが、1940 年代には村の規模は小さく農民の数は 72 年時点の 3 分の 1 程度であった。20 世紀前半期に地主主導の開発で水利施設の建設や整備が進み農地が拡大したが、労働力が決定的に不足し、この地方を移動経路としていた遊牧民が農民として多くリクルートされた。とくにこの地方の西半分の村には遊牧民出身者が多く、しかも定住の時期も 20 世紀初頭から 1940 代ころまでに集中した。ポレノウ村も農民の多くは遊牧民出身である。マルヴダシト地方の西半分のベイザー、ラームジェルド、アバルジ、ハフラッケソフラーには〈商業・手工業村〉がまったく存在しなかったのもこの地域の開発が遅れていたことと関係があると思われる。したがって幹線道路沿いの交通の要衝に位置する〈商業・手工業村〉も農地の開発による谷平原の村落域の人口増と農地の拡大が進んだ 20 世紀前半期に商業と手工業を活発化させたと考えられる。この〈商業・手工業村〉は 1960 年代に入るとモータリゼーションによって商業センターが新たな交通の要衝であるマルヴダシト町に一極化する過程で衰退過程をたどることになり、続く地方の農業の近代化による発展期にさらにマルヴダシト町のみが商業のセンターとして急成長することになったのである。

1980 年代以降について付け加えると、イラン革命期に村の農民による地主農場の再分割が進んだ。この結果、農民は農地の規模を増やし土地無し層も農地を獲得した。それまでの休閒農業

は集約度の高い農業に変わり、革命後のイスラム政権が農業保護政策をとり公私による水利開発と農業投資が進んだことで農業生産性は大きく伸びた。この時代は農民が自立経営によって成長した時代といってよい。地方の農業に関連した農産物加工等のアグリビジネスも盛んになり、マルヴダシト市もまた 2000 年代には人口が実質 10 万人を超えるまでに発展した。1980 年代から現代までの時代については稿を改めるが、マルヴダシト市は今日においても地方農業の発展を基礎とした農業都市としての性格を持ち続けている。

注

- 1 本論文は神奈川大学の研究員であるケイワン・アブドリ氏の協力によるものである。
- 2 イラン統計センター『イラン村落統計総覧』（ペルシア語）テヘラン，1976 年のファールス州の部
- 3 後藤晃・ケイワンアブドリ「イラン土地制度史論(1)」『商経論叢』41-3・4, 2006 年，20-31 ページ参照
- 4 Keddie, N., *Stratification, Social Control and Capitalism in Iranian Villages*, in Antoun, R. and Harik, I. ed., *Rural Politics and Social Change in the Middle East*, London, 1972, p. 365, Lambton, A., *Rural Development and Land Reform in Iran*, in Issawi, C. ed., *The Economic History of Iran 1800-1914*, Chicago, 1971, p. 52
- 5 イラン統計局『農業センサス 1960 年』，158 ページ
- 6 大野盛雄『ペルシアの農村』東京大学出版会，1971 年，351 ページ
- 7 Curzen, G., *Persia and Persian Question*, London, 1892, Vol. 2, p. 41
- 8 上岡弘二他『ギーラーンの定期市』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1988 年
- 9 岡崎正孝「イランの農村—テヘラン近郊ターレブアーバード村における事例研究」『アジア経済』Vol. 5, No. 2, 1964 年，92 ページ
- 10 大野盛雄，前掲書，355 ページ
- 11 H. ヴルフ『ペルシアの伝統技術』2001 年，252 ページ（*The Tradeitonal Crafts of Persia*, Massachusetts Institute of Technology, 1966）
- 12 ヴルフ，前掲書，284 ページ
- 13 後藤・アブドリ，前掲論文，31—36 ページ
- 14 Bhrier J., *Economic Development in Iran*, Oxford, 1971, p. 134
- 15 後藤晃『中東の農業社会と国家』御茶の水書房，2002 年，288 ページ
- 16 Iran Almanac 1972, p. 394
- 17 イラン経済省統計局の 1956 年センサス
- 18 田中紀彦「イランにおけるむらと町を結ぶ交通の農村的形態」『東京大学東洋文化研究所紀要第 70 冊』1977 年を参照
- 19 イラン経済省の 1967 年の報告

【資料 1】 1972, 3 年におけるボレノウ村の農民 1 人当たりの収入とコスト

小麦の収量：72 年は 3.6 トン，73 年は 2.4 トン

小麦の庭先価格

収穫期：20 リアル/3 kg, 端境期：25 リアル/3 kg

(ここでは，小麦 3 kg の価格を 22.5 リアルで計算する)

農家の小麦の自家消費量：大人 1 人当たり年間 200～250 kg

家族 4 人 (大人換算) とすると，年間消費は 800～1000 kg

自家消費用の小麦の製粉は隣村 (エスファドロ村) の製粉所で行い，

製粉のコストは 300 リアル (30 リアル/90 kg)

小麦の販売による収入

72 年と 73 年の収量の平均 3.0 トンで計算すると，自家消費分を差し引いた量である 2.0 トンが販売される。ただ，収穫期には自給分を除いた量の 1/2 ないし 2/3 程度が販売され，残りは日常品や食料の購入に際して支払いに当てられる。

小麦の販売先

マルヴダシト市の商人が収穫時に村に買いに来る。

ボレノウ村の農民と取引のある穀物商 (販売する商人は固定していない)

ザルガーミー通り	ハジー・ナジャーブ
	ハジー・バcssイリー
	ワッキリ・アキバル
サーディー通り	キャラスキャール
	ミルザール

大麦は家畜の飼料用であり，販売はしない。

青刈りすることが多いが，実を収穫することもある。

綿花は 0.5 ha の農地で栽培される。

収量は 0.6 トン

販売収入は 15,000 リアル (単価：25 リアル/kg)

小麦換算で 1.8 トンに相当する。

販売先：シーラーズの繰り綿工場

小麦・大麦の生産コスト 8040 リアル

肥料：2,800 リアル (価格 320 リアル/50 kg, 施肥量 440 kg)

農薬：政府支給

トラクター作業

賃耕・整地・畦立て：2,400 リアル

脱穀：600 リアル (収穫の 3/100=90 kg)

種代：2,240 リアル (8 リアル/kg 政府から購入，播種量 280 kg)

綿花の生産コスト 1,900 リアル

種代：180 リアル (価格 8 リアル/kg, 播種量 45 kg/ha)

肥料代：1,500 リアル (価格 500 リアル/50 kg, 施肥量 150 kg)

農薬：100 リアル

運送料 120 リアル (25 リアル/kg)

羊・ヤギの販売収入

親羊 2 頭，親ヤギ 2 頭を販売した場合 6,000 リアル

価格 羊：親 2,000 リアル，子 1,000 リアル
 ヤギ：親 1,000～1,300 リアル，子 800 リアル
 絨毯（1 m×1.5 m，2 枚当たり）
 販売価格：7,000～8,000 リアル
 コスト
 羊毛代：1,600 リアル（半分を自給，半分を購入した場合）
 1 枚で 10 kg の羊毛が必要。羊 1 頭当たり 1.5 kg の羊毛が得られる。
 羊毛価格：500～600 リアル/3 kg
 春にマルヴダシトに市が立つ。また商人が村に売りに来る。
 染色代 660 リアル（100 リアル/3 kg）
 その他のコスト
 水代 520 リアル

農民の収入と費用

	販売収入	費用
小麦	22,500 リアル	8,040 リアル
綿花	15,000 リアル	1,900 リアル
羊・ヤギ	6,000 リアル	
じゅうたん	8,000 リアル	2,260 リアル
水代		520 リアル
その他（農具等償却費）		1,500 リアル
社会的費用		3,000 リアル
計	51,000 リアル	17,220 リアル

農民の純収入 33,780 リアル（小麦自給分を含む）

小麦換算で 4.7 トン

労働者の日給

非熟練の日雇い農業労働者	80～100 リアル/日
コンバイン運転手	250 リアル/日（6 ヶ月）

【資料 2】 マルヴダシトの商店 (1974 年) (図 24 参照)

摘要

- ① 雑貨店はさまざまな日用品を商う。概して規模は小さく、食品中心、衣類中心、石鹼・塩・ひも・食器などの日用雑貨を扱う雑貨店に分けられるが、区別できない店も多い。
- ② 自動車、バイク関連は、ほとんどが修理、部品販売である。
- ③ 店はもともと貸し店舗であり、間口はほぼ 2.5 m を 1 ユニットとし、多くの店は 1 ユニットだが、2 ユニット、さらにより大きな店もある。

メインストリート

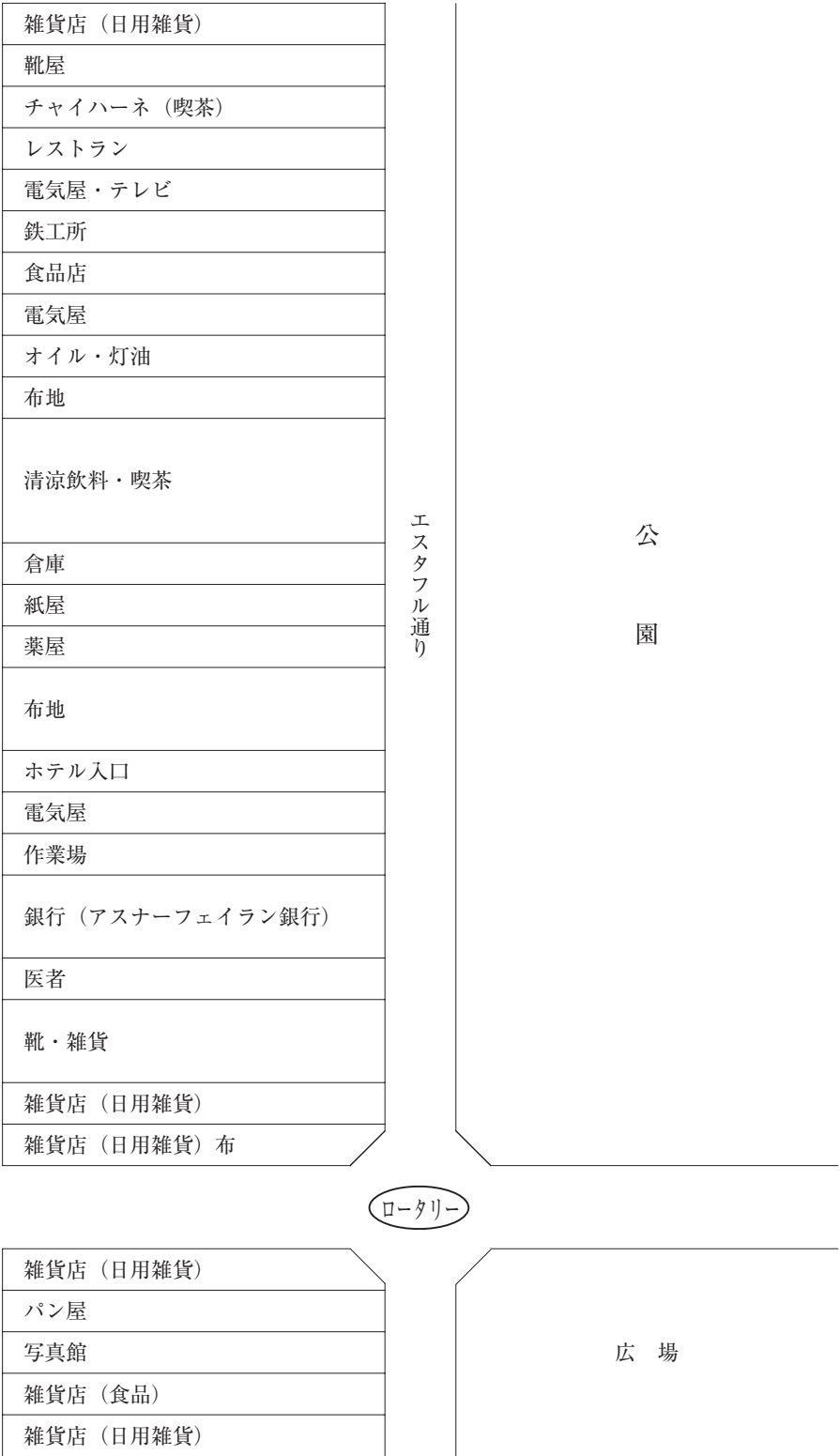
		ペルセポリス方面
		↑
溶接業		自動車修理 (工場)
雑貨店 (食品・日用雑貨)		
工作機械		
雑貨店 (食品・日用雑貨)		八百屋
セメント		工作所
雑貨店 (豆, 茶)		鉄工所
雑貨店 (レモン, 豆, 小麦粉)		セメント
雑貨店		オイル
鉄工所		
建設資材 (板, ガラス)		工作機械
染色		自動車修理
木工所		タイヤ
鉄工所		鉄工所
タイヤ修理		
八百屋		
雑貨店 (食品・日用雑貨)		映画館
自転車修理		
セメント		

自動車修理	エ ス タ フ ル 通 り	
ボンベ		レストラン
電気屋		
雑貨店		時計修理
雑貨店		八百屋
セメント		肉屋
銀行		雑貨店（食品）
		鉄工所
		レモンジュース
		雑貨店（食品・日用雑貨）
雑貨店		雑貨店（食品・日用雑貨）
雑貨店		倉庫
レストラン		
肉屋		
木工所		
雑貨店		水道配管
八百屋		ガスレンジ等
染色		雑貨店（食品・日用雑貨）
穀物商 米，麦		茶
雑貨店		雑貨店（食品）
雑貨店		自動車用バッテリー
雑貨店		自転車修理
雑貨店		八百屋
雑貨店		雑貨店（食品・日用雑貨）
雑貨店		雑貨店
雑貨店（衣類）		パン屋
雑貨店（米）		粉屋
雑貨店		理髪業
周旋業		パン屋
八百屋		雑貨店
自転車修理		靴屋
雑貨店（衣類）		トタン屋
宝石屋		雑貨店（食品）
周旋業		オイル
雑貨店（日用雑貨）		八百屋
雑貨店（食品・日用雑貨）		

穀物商 米, 麦	エ ス タ フ ル 通 り	菓子屋
周旋業		イラン航空 支所
布		肉屋
染色業		布団・生地
米, 茶		雑貨店 (食品)
雑貨店 (糸・ひもなど日用雑貨)		茶
布		肉屋
雑貨店 (日用雑貨)		ブーリヤー
雑貨店 (日用雑貨)		雑貨店 (日用雑貨) 衣類
理髪業		八百屋
雑貨店 (衣類)		食品
宝石屋		レストラン
雑貨店 (食品)		菓子屋
雑貨店 (衣類・靴)		
かばん屋		電気屋
布		靴屋
洋品店		雑貨店 (食品)
靴屋		パン屋
ひも屋		八百屋
墓石屋		自転車修理
茶		八百屋
靴・洋品		自動車オイル
八百屋		靴製造
仕立て屋		ペンキ・ガラス
布		洗濯屋
雑貨店 (食品, 米・茶)		ガラス屋
八百屋		八百屋
石鹸		衣類
雑貨店 (日用雑貨)		パン屋
レストラン		雑貨店 (食品)
肉屋		パン屋
雑貨店 (食品・日用雑貨)		
電気屋		
洋服屋		

布	エ ス タ フ ル 通 り	木工
布地屋		
レストラン		木材
レストラン		染色屋
布		木工
雑貨店（食品・日用雑貨）		雑貨店（日用雑貨）
雑貨店（日用雑貨）		靴屋
洗濯屋		モスク 入口
布		菓子屋
雑貨店（日用雑貨） 服・かばん		
雑貨店（食品・日用雑貨）		八百屋
洋服屋		雑貨店（食品）
布団・じゅうたん		染色屋
洋服屋		雑貨店（食品・日用雑貨）
理髪業		染色屋
靴屋		肉屋
雑貨店（食品・日用雑貨）		雑貨店（食品・日用雑貨）
雑貨店（食品・日用雑貨）		雑貨店（日用雑貨）
ギッブエ屋		雑貨店（日用雑貨）
雑貨店（日用雑貨）		パン屋
石鹼 問屋		洋服屋
雑貨店（日用雑貨） 布		パン屋
雑貨店（日用雑貨） 布		パン屋
雑貨店（日用雑貨）		八百屋
写真館		雑貨店（日用雑貨） 靴
電気屋		雑貨店（食品） 穀物
作業所		八百屋
雑貨店（食品）		レストラン
布		雑貨店（衣類）
洋服屋・布地		写真館
菓子屋		雑貨店（日用雑貨）
雑貨店（食品）		雑貨店（日用雑貨）
ガス器具屋		食品
		パン屋
		自転車部品

洋品屋	エ ス タ フ ル 通 り	染色屋
雑貨店		雑貨店（日用雑貨）
理髪業		雑貨店（日用雑貨）
雑貨店（食品・日用雑貨）		肥料商
雑貨店（食品・日用雑貨）		銀行（メッリー銀行）
雑貨店（食品）		
雑貨店（食品）		
菓子屋		
布地・洋品		銀行（パルス銀行）
薬屋		
雑貨店（食品）		
布地屋		
レストラン		ラジオ
雑貨店（食品）		八百屋
自動車部品		肉屋
		食品店
		映画館
仕立屋		電気屋
菓子屋		モーターバイク店
米屋		公 園 ・ 役 所
じゅうたん		
洋品・敷物		
穀物商		
穀物商		
作業所		
帽子屋		
洋品		
布		
薬屋		
布地		
布地・布団		
雑貨店（日用雑貨）		
パン屋		



銀行 (サーデラッテ・イラン銀行)
自動車 オイル
レストラン
八百屋
雑貨店 (食品)
雑貨店 (食品・米)
自転車, ストープ
レストラン
レストラン
タイヤ
八百屋
ランプ直し
自動車ダイナモ
米, 食料油
染色屋
染色屋
菓子屋
レストラン
パン屋
ペンキ
自動車用バッテリー
雑貨店 (食品)
自動車部品
洋服・衣類
肉屋
八百屋
雑貨店 電気
ガラス
雑貨店
モスク 入口
雑貨店 (日用雑貨) 布
銀行 (バザルガーニーイラン銀行)
八百屋
自転車部品

サー
デー
ー
通
り広
場

理髪業	サー デー イー 通 り	
雑貨店（日用雑貨） 布		
レストラン		
作業所		
酒屋		
八百屋		
雑貨店（食品・日用雑貨）		
パン屋		オイル
雑貨店（食品）		ペンキ・ガラス
電気屋		染色業
雑貨店（日用雑貨）		八百屋
雑貨店（日用雑貨）		自動車修理
パン屋		工作機械
肉屋		自動車修理
雑貨店（食品）		オイル
セメント		オイル
自動車部品		雑貨店（食品・日用雑貨）
穀物商		肉屋
雑貨店（食品）		雑貨店（食品・日用雑貨）
雑貨店（食品）		八百屋
自動車部品		オイル
雑貨店（食品）		洗濯屋
雑貨店（食品）		雑貨店（食品・日用雑貨）
肉屋		レストラン
雑貨店（食品）		ガソリンスタンド
八百屋		
雑貨店（食品・日用雑貨）		
雑貨店（食品・日用雑貨）		
理髪業		
自転車部品		自動車部品
雑貨店（食品）		自動車部品
雑貨店（食品）		トラクター屋
酒屋		自動車オイル
ランプ直し		

作業場	サ ー デ ィ ー 通 り	工作機械
自動車部品		オイル
自動車 電気部品		自動車タイヤ修理
パンク修理		モーターバイク修理
鉄工所		肉屋
自動車 修理		鉄工所
鉄工所		鉄工所
食品		自動車オイル
作業場		自動車 ラジエーター
食品		雑貨店 (日用雑貨)
		染色業
雑貨店		自動車オイル
肉屋		作業所
八百屋		トラクター屋
雑貨店 (食品)		
雑貨店 (日用雑貨)		
鉄工所		仕立て屋
自動車 事務所		自動車修理
雑貨店 (食品)		自動車用電気
雑貨店 (食品)		
穀物商		
自動車修理		
布団屋		

茶	
モーターバイク修理	
工作機械	

↓
シーラーズ方面

ザルガミー通り

ロータリーから工場と反対方向へ



雑貨店（食品）	ザ ル ガ ミ ー 通 り	タクシー事務所
事務所		靴屋
雑貨店		布
雑貨店		茶
じゅうたん		レストラン
事務所		雑貨店（食品）
事務所		ランプ，かばん
雑貨店 靴		染色業
雑貨店（日用雑貨）		自転車 修理
雑貨店（食品）		茶
衣類，布		サラ
肉屋		油
靴		自転車 修理
雑貨店		布
八百屋		レストラン
布		布
雑貨店（食品）		銀行（セパー銀行）
雑貨店（食品）		
八百屋		八百屋
穀物		洗面所道具
雑貨店		

雑貨店 穀類	ザ ル ガ ー ミ ー 通 り	オイル
仕立屋		雑貨店 穀類
雑貨店 (日用雑貨) ひもなど		事務所
雑貨店 (食品)		
仕立屋		オイル
八百屋		理髪業
ミシン・ストーブ, テレビ		雑貨店
穀類		布
雑貨店 (食品)		洋服
雑貨店 (食品)		肉屋
雑貨店 (食品)		茶
レストラン		雑貨店 靴
穀物商		染色業
自転車 部品		雑貨店 靴
穀物		染色業
セメント		雑貨店
雑貨店		雑貨店 (食品)
雑貨店 (食品)		雑貨店 (食品)
仕立屋		雑貨店 穀物
雑貨店 (食品)		穀物
靴		パン屋
雑貨店 (日用雑貨)		雑貨店 (食品)
事務所		八百屋
肉屋		八百屋
八百屋		鉄工所
雑貨店 (食品)		木工所
雑貨店 (食品)		レストラン
鉄工所		油屋
雑貨店 (食品)		雑貨店
八百屋		事務所
穀物		鉄工所
		パン屋

雑貨店

オイル
鉄工所
雑貨店（食品）
セメント
雑貨店（食品・茶）
自転車 修理
肉屋
雑貨店（食品）
雑貨店